

シンポジウム
横浜の都市デザイン活動の40年とこれから

記録

【全体概要】

日時：平成23年7月30日（土） 13時00分～16時30分（受付開始12時30分）

会場：ヨコハマ創造都市センター 3F（事前申込必要・参加無料）

主催：横浜市都市整備局

共催：大学まちづくりコンソーシアム横浜

【プログラム】

挨拶 小松崎 隆／横浜市副市長

第1部 | 講演+鼎(てい)談 「都市デザインの40年を振り返る」

講師 国吉 直行／横浜市立大学特別契約教授

コメンテーター 佐藤 滋／早稲田大学教授

西村 幸夫／東京大学教授

第2部 | ラウンドテーブルディスカッション「これからの都市デザインが目指す方向」

ミニレクチャー1 50年後の横浜の姿 鈴木 伸治／横浜市立大学准教授

ミニレクチャー2 モビリティデザイン 羽藤 英二／東京大学准教授

ミニレクチャー3 コミュニティデザイン 山崎 亮／studio-L代表、京都造形芸術大学教授

スピーカー 佐藤 滋／早稲田大学教授

西村 幸夫／東京大学教授

鈴木 伸治／横浜市立大学准教授

羽藤 英二／東京大学准教授

山崎 亮／studio-L代表、京都造形芸術大学教授

大学まちづくりコンソーシアム横浜委員

横浜国立大学／北山 恒・野原 卓、神奈川大学／曾我部 昌史、

関東学院大学／中津 秀之

特定非営利活動法人 横浜プランナーズネットワーク

山路 清貴 理事長、菅 孝能

ファシリテーター 国吉 直行／横浜市立大学特別契約教授

【告知】

○司会

本日は「横浜の都市デザイン活動の 40 年とこれから」にお越しいただきまして、ありがとうございます。本日多くの方にご来場いただいております。満席となっております。

今日は講演とてい談それぞれ 30 分ずつの 1 時間の第一部と、休憩を挟んで第二部は 2 時 15 分頃から 3 人によるミニレクチャーとパネルディスカッションを予定しています。

終了は 4 時半の予定です。終了した後に大学まちづくりコンソーシアム横浜による交流会がございます。

【開会】

○司会

本日は「横浜の都市デザイン活動の 40 年とこれから」にお越しいただき、ありがとうございます。

このシンポジウムについてですが、文字通り横浜の都市デザイン活動の 40 年を振り返り、その意味を確認するというものです。将来に向けた方向性のアイデアを出し合うこと、そしてそれにまつわる様々な分野の皆さんとの交流のきっかけづくりなどを目的としています。今日は講演とてい談の第一部と、そしてミニレクチャーとパネルディスカッションの第二部の二部構成となっております。会場には都市計画やまちづくりなどの研究、計画に関わる専門家、活動の担い手、また学生の皆さんにお越し頂きました。また、横浜市や他の都市の行政職員の皆さんも参加しています。

【主催者挨拶】

○司会

では、本日の主催者を代表いたしまして、横浜市、小松崎副市長からご挨拶申し上げます。小松崎副市長お願いいたします。

○小松崎

皆さん改めまして、こんにちは。横浜市副市長の小松崎でございます。本日はこのシンポジウムに多数ご参加いただき大変ありがとうございます。司会の方から先ほど詳しい説明がありました。横浜市は全国に先駆けて都市デザイン行政というものに取り組み始めて、ちょうど 40 年という節目の年を迎えたわけでございます。これをきっかけにして、来し方行く末を考えていこうではないかということで、今日は皆さんにお集まりいただきました。

ご参加の方々を眺めますと、ずっとこの分野に携わっている方々、ベテランの方々もいらっしゃいますし、学生の方もいらっしゃるということで、多様なメンバーの方々にご参加いただいて、実りあるディスカッションが出来るのではないかと考えているところです。

横浜市はこの 40 年、先鞭をつけてきたという大いなる自覚もありますし、またこの社会に都市デザインとか都市の美しさという普遍的な価値観を一定程度作ることができたのではないかと、自負も持っています。

また一方で、この都市デザインというものは、それが 40 年前に組織として出来た段階から、あくまで私の解釈ですけれども、ある意味の運動論、実践的な運動論とでも申しましょうか、そのようなかたちでずっと走り続けてきた分野です。

これから先の都市デザイン行政、広い意味の都市デザインというものを考えた時には、例えばその対象領域であるとか、あるいは方法論であるとか、またはもともとの存在意義、存在基盤といったこと自体も大いに変化していく、そのような可能性を秘めているのではないかと考えています。

ですから今日は 40 年を振り返るということも勿論大事なテーマですが、どちらかと言えばかなり目線を先に置いて、これから我々は何をしていくべきかということについて意味ある議論をしていきたいと思っております。今日このラウンドテーブルを囲んでらっしゃる論客の方々は本当に最適な、最強のメンバーを集めることができたということで、相当刺激的な議論が出来るのではないかと私も期待しています。

短い時間ではございますけれども、是非、皆さま方最後までゆっくりとお楽しみいただければと思っております。今日はどうもありがとうございます。

○司会

ありがとうございました。それでは第一部を始めます。

【第1部】 講演+鼎(てい)談 「都市デザインの40年を振り返る」

講師 国吉 直行／横浜市立大学特別契約教授
コメンテーター 佐藤 滋／早稲田大学教授
西村 幸夫／東京大学教授

○司会

30分の講演ののち、コメンテーターの二人を交えて30分のてい談、三人による対談を行います。発言者をご紹介しますおきましょう。

講演は国吉直行さん、1971年に横浜市役所に入庁して以来40年の間横浜の都市デザイン行政に関わってきました。今年の3月に横浜市を退職して今は横浜市立大学で特別契約教授として教鞭をとっています。

そして後ほどのてい談にご登壇いただくコメンテーターのお二人は、早稲田大学教授であり都市・地域研究所所長の佐藤滋さん、そして東京大学教授で副学長の西村幸夫さんです。

お二人はともに都市計画やまちづくりがご専門で、国内外の事例にも詳しいということで、今日は外から見た横浜の都市デザインについてご意見をいただきたいと思います。では、まずは国吉さんお願いいたします。

○国吉

はじめまして、国吉と申します。本日は宜しくお願いいたします。30分という短い時間で40年を振り返るということをやろうと思います。今日はスライドをたくさん用意しました。また、事務局の方で作りましたこういったパンフレットがあります。これの中身も都市デザインのことが書いてありますので、これも見ていただければと思います。

もう一つペーパーを用意しました。これは昨晚作ったばかりで、文字が小さいので私も老眼鏡をかけないと見えないんですが、横浜のまちづくりとこれに関わった時代の流れを書いております。1960年代の飛鳥田市長の時代からのことを少し書いており、それから最初の頃、都市デザインの推進に関わった方々の名前を書いております。企画調整局の田村明さん、そのもとで他の土地利用のことをやっておられたんですけども後に都市デザインのリーダーに加わって頂きました内藤さん、岩崎さん、あるいはその当時の若い人では北沢さん、そういった方々の名前を書いております。

(企画調整局の都市デザイン活動)

最初は、地域の視点と地域のニーズに基づいて取り組む実験的な都市づくり活動ということで、田村明さんを中心に進めていった。骨格やインフラを整えるプロジェクトの推進とか、土地利用のコントロール等をやっていたんですが、その一方で少し遅れてですね、都市の個性ある文化的な都市空間を作ろうという活動を実験的に始めた。

岩崎駿介さんというボストン市役所での経験のある方をリーダーとして、岩崎さん自身も最初は正式な職員ではなくて嘱託の研究員だったわけですが、彼を中心とした臨時のチームが作られた。私もそこに嘱託の研究員として加えて頂き、たまに近くの課にいた内藤惇之さんが応援団として加わって頂く、そんな感じのチームでした。

横浜の都市デザインというのは、広い意味での都市デザインと狭い意味での都市デザインということをよく言われるんですが、当初の頃の都市デザインというのは土地利用の問題とか、プロジェクトの問題とリンクしながらやってたというのが非常に大きかったと思います。

例えば用途地域の指定と一緒に加わっていますし、主に商業地域の指定は我々都市デザインチームが行っております。それから市街地環境設計制度といったコントロールの問題でも一緒に加

わっている。

あるいはいろんな六大事業にも節々で都市デザインチームとして加えていただいている、こういったことが大きかったと思います。

空間デザインだけやっているというよりも、都市デザイン活動は、全体の流れの中で大きな横浜市の戦略、都市づくりの戦略の一環として、プロジェクトとかコントロールを支えつつ、都市空間の創造ということを行おうとしたということが大きいと思います。

みなとみらいというような事業で、当初から節々で加えていただくとか、港北ニュータウンの整備でも都市デザインチームがセンター地区をやってみろというふうに言われたり、金沢地区でも住宅地の計画等に加わるとか、あるいはベイブリッジとか、こういうものに加わってやっていた。緑の軸線等の骨格を作る都市デザインにも関わってやっていくという時代であります。

また、田村明さんが最初にやられた高速道路を地下化していく、都心部の道路の計画を地下化しようということで国にお願いして地下化していきました。こういった事業も、大きな意味の企画調整局の都市デザイン活動だったというふうに思います。

(既存の街の再生への取組)

みなとみらい事業というのはそう簡単に進みませんので、この街はいずれ立派になるだろうけれども、その前に既存の街である関内地区、元気がなかったこの街の再生というものを都市デザインチームとしては中心でやろうということになりました。田村明さんから言われ、岩崎さんを中心に関内地区の再生を集中的にやっというふうに考えました。

既存の街を再生するという手法がなかなか日本では取られているということがなかった。既存の街の方々の活動を継続しながら街を良くしていく、これは非常に難題だけれどもやらなきゃ駄目だということだったと思います。

そこにいろんな建築的な視点、あるいはランドスケープ的な視点などを盛り込みながら、豊かな歩行空間を作る、というものを実践していくわけですね。実験的に、そして次に周辺の街並みを作っていく、というようなことを行っていくわけです。

ここで大きかったのはプロジェクトとかコントロール活動と連携して魅力的な都市空間を作っていく、こういったものを運動的にやっていって、あまり横浜だけにこだわらず、これはやはり日本の各地に飛び火させていく、こういうことを期待したということです。特に岩崎さんはそういった運動にしたいと考えていました。

この前、広瀬良一さんが、企画調整局というのは参謀本部的な役割だったと話されておりましたけれども、そういった側面もあったのかなあとは思いますが、実際は企画調整局の活動の中で都市デザイン室が最も地域に入っていった、前線に入っていった部隊だったと思います。特に私なんかは平のスタッフでしたので、前線に出て行ったということが多かった。

現場密着型で、地域のニーズ、個性を掘り上げてやっていく、地域コーディネーター型であったということ。それからやはり提案する、企画調整するだけではなくて、最後の形にこだわるということで、非常に優秀な設計者とかそういった方々にも協力をいただきながら、最終的に魅力的なものにしていく、そういうことをきちんとやっていく。創造型、デザイナー型の側面を持っていた、というのが大きいかと思います。

山下公園の前面街区の実験、馬車道、伊勢佐木、こういったところの成果を作っていくわけで

す。特に関内地区の場合は横浜のなかの横浜だと思ってらっしゃる方がたくさんいて、横浜らしさにこだわってらっしゃる方がいらっしゃる。そういう方々にとってみると、東京の物真似はして欲しくないというようなことが非常に強い。こだわりですね、こういったものを大切にしていけないと我々の活動も出来ないという状態を感じました。

それが非常に大きくて、地域に出かけ横浜にこだわる地域市民と協働するというようなところから、横浜なりの現場密着型の都市デザインというものをやっという、地域型のデザインコントロールの手法としてのまちづくり協定とか、地域運営型のまちづくり委員会とかですね、こういったものを色々、地域市民と一緒に開拓していった、というのが現場密着型から生まれた取り組みだったと思います。

(庁内連携と都市デザイン室の役割)

実際は庁内の各局と色々連携してお手伝いいただきながら、こういったことを広げていくということですから、庁内的にも運動型であったということがありますし、地域においても運動型であった。そして都市デザイン室はそういう意味で1つのステーションであって、各局にそういった同じようなことをやろうと目指す人がどんどん増えていって、全体として横浜市の中では地域の魅力を各局が連携してやっという、進めていく、というような流れがどんどん出来ていったというふうに感じております。

そういった事例はパンフレットにも出ております。地域市民も自立し、地域そのものも個別の魅力を作っというように自立していただきたい、そしてまた全て横浜市が設計するんじゃなくて地域なりにデザイナー、設計者を活用して、それぞれが雇うくらいの気持ちでやっいただきたい、というようなことで、どんどんそういった主体的活動が浸透していったのではないかと思います。

途中からは、元町などはでは、デザインのことは自分たちでやるから、横浜市は裏方だけやってくれればいいというふうになり、非常にプライドの高い地域市民による活動自体も先鋭的になっていった。こちら学ぶことが多かったというふうに思います。

これが最初の方です。そして歩行空間を軸として、さらに歴史とかですね、こういうものも少し付加している。

(都市デザインの7つの目標)

7つの目標というのは実際は掲げておりますが、本当は7つでも10個でもいくつでもあるわけですが、とにかく最初は分かりやすい言葉やスローガンを大事にしようと考えました。そして関内地区はいろんな施設が点在しておりますので、こういったものをつないで回るという視点から、歩いて楽しい街のネットワークづくり、こういったことを軸にやっという、展開していったと思います。

(歴史的資産の活用)

こういった中で、光や色彩による演出、横浜の都市アイデンティティを深める、ということですね、途中からはやっという。

横浜の市民のアイデンティティを高めると言いますと、青葉区とか緑区とか郊外のほうの方々は横浜の中心部にあまり来ない、渋谷の方に行かれるというそういう方々、お父さんも勤務地が東京だと、横浜は遠いと言われた時代もあったんです。横浜は、特に中心部は、行く魅力の何もない街だと、そういうことであってはならないということで、歴史的建造物を中心に光をあてる、実験的なことを行なってきた。

これは非常に評判が良くてですね、これは一つの戦略でもあったわけですけども、マスコミでも取り上げていただいて多くの方々が横浜を見にきていただく。いろんな歴史的建造物のファン

が出来ていくわけです。郊外のほうからも見に行ってみようかと。渋谷とは違う横浜のアイデンティティを作らないと来てくれなかったわけですが、そういった方が港へ歴史的建造物を見に、そういう機会がだんだん増えていった。

京都なんかには比べると短い歴史ですけど、150年の歴史、その中でも多少残っている100年足らずの歴史的建造物ですね、これもどんどん壊れていった時代もありました。しかしそういう中で市民の中から是非やはり大事にしていきたい、一部は市民自ら残していただくというような事例も山手地区でやったりとかありました。こういったビルが壊れるという時に地域の市民がですね、横浜市も一緒になって保存を、ビルの持ち主に要望して欲しい、ということで横浜市も一緒になってお願いしていくわけです。

歴史資産保存型というよりも活用型ということで、建築史家の鈴木博之さんなんかからは評判悪いんです、壁面だけを残すとかですね、それはやむを得ないというか、60点でも残ればやっぱり有難いと我々は思っておりますが、こういうことで協力いただきながら建物下部だけを見ると歴史がまだ生き延びている、生き続ける、というような事例がたくさん出てくるわけです。山手地区なんかでもですね、無くなりつつある西洋館をできるだけ残していただくといった活動、あるいは公園の一部として移築するとか、こういった事例を増やしていきました。

(みなとみらい事業でのデザイン的な実験)

みなとみらい事業というのは非常に息が長い仕事であります。関係された小沢恵一さんも見えておりますけども、飛鳥田市長の時代に構想が作られて、細郷市長の時代に事業がスタートし、高秀市長の頃にかかなり出来上がるといった長い時間かかるものです。

こういう事業の中でも関内地区でやったようないろんなデザイン的な実験、街づくり基本協定といったかたちで高さのコントロールであるとか、建物の景観演出とか、あるいは都市軸を建物所有者みんなで出し合って作っていく。自ら作り上げて、行政だけでやるんじゃないで、あるいは公団だけでやるんじゃないで、地域の運営の協議会を結成してもらい、こういったことをお互い認識し合いながら作っていく、そういった場がみなとみらい地区でも出来てくるわけです。

みなとみらい地区はまだそれでも7割ちょっとくらいしか進行してない。なかなかスピードの遅い、でもまあこういうスピードの遅さも横浜らしくて、いろんな時代の顔が出来ていいのかなあというふうに思っています。

そういった中で歴史的資産を活かす、新たな都市活動に活かす、というようなことを強力にお願いし、三菱地所の方もこういったことを受け入れていただいて、かつてのドックの保存は活用型の保存という新しいタイプのモデルとなった。こういう形でも重要文化財として指定されると、文化庁も新しい残し方として評価するという形のものを作っていただいたわけです。

赤レンガ倉庫については横浜市が取得して取り組んでおり、民間で活用していただいている。隣の自動車道、新港地区。赤レンガのあるこの地区と対照的に、対比的に未来を見せる中央地区、歴史と未来をセットで見せることによって飽きない街、いろんな側面が見られる街を作っていくということが出来つつあるわけです。

(水際線と縦の軸)

つい最近、独自のコンセプトのものを大小様々なプロジェクトを展開して、ようやく、水際線については3.5キロくらいの魅力的に歩き回れるゾーンが出来上がってきている。そして縦に貫く日本大通りの先に、象の鼻地区という新しい結節点の空間が2009年に完成した。

水際線と縦の軸、こういった空間づくりというのは長い間いろんな市長が、高秀市長の時は開港シンボルゾーンといったこともありますし、飛鳥田市長の頃に緑の軸線としてスタートし、い

ろんな時代で別の言葉で語っておりますけども、2009年のチャンスといったものを見つけて完成させた。これが中田市長の時代だったわけですけども、いろんな市長の理解も得ながら推進していった。特に高秀市長については歴史的建造物の資産保全という非常に大きな推進力になったというふうに認識しております。

そういうことで40年くらいかけて都心部の一体化というものを完成していったということが言えるかと思えます。

(都心周辺や郊外地域への展開 地域まちづくり)

市民の方々からは、郊外部でもまちの魅力づくりをやってよ、ということが当然出てきますので、都心部周辺あるいは郊外へという活動も一方では行っております。

歴史的建造物については郊外部においては長屋門公園の保存とかですね、開港文化のある関内地区なんかとは違った郊外部のまちづくり、それから緑の水辺の緑地といったもの、川沿いのプロムナードづくりとか、こういったものも行って、各区が魅力的な個性ある街になっていくということ、区の魅力づくりといったものと併せて地域の歴史資産の保存活用をやっていく、というようなことも一方ではやっていったわけです。

ただ郊外というのは非常に距離がありますので、都市デザイン室、都市デザインチームが関内とかみなとみらいとかでやったように、毎日のように行くというようなわけにはいかない。

郊外についてはやはり区が中心となった活動があって、それをつないでいく、そういうことをやっていかないと駄目かなというようなことで、区を主体とした活動が出来るような方向も少し出てきた。

地域の市民と考えるという、関内でやった時は商業的な市民、商業者ですね、そういった方々と、郊外においては住民としての市民ですね、こういった方々との協働、こういったものもどんどん出てきて、ワークショップといった言葉なんかで公園をつくる整備を公園部局と一緒に市民の方と一緒にやった、そういったことを仕掛けていく。

こういったものは現在、地域まちづくりというかたちで都市デザイン室と近くの別のセクションが担当しておりますけれども、郊外部のまちづくり、あるいは市民参加の、市民協働のまちづくりというのは展開しつつあるわけです。

(都市デザインの交流・発信)

また、都市デザインの交流・発信ということでいいますと、第1回都市デザインフォーラムというのを1992年、それから第2回を1998年に開催してですね、いろんな国際的な専門家が集まって横浜を舞台に議論していただきました。

第2回の国際会議の時は地域からの発想ということでですね、横浜の港北ニュータウン地区あるいは関内地区、金沢地区、さらに横須賀、鎌倉までですね、地域会場を設けて、それで海外の専門家と一緒に地域市民等が議論するといったことも行い、そういう中で、やはり創造性みたいないろんな人が重なり合うことで高めていこうといったこともトライして行きました。

また、他都市との交流といいますと職員交流とかですね、そういったことです。マレーシアのペナンとか上海とかですね、あるいは国内他都市との交流も活発に行いましたし、神奈川県下の相模原市とかですね、鎌倉、横須賀、こういう職員の方が横浜の街に来て一緒に仕事をしていた。そういった交流もあった、最近は高山からも来られているというようなこともあります。

この写真はたまたま1988年ぐらいにで、技術交流事業で私がマレーシアのペナンに行った時の写真です。ジョージタウンという最近世界遺産になった街の提案を作ったんですけども、我々、

西脇さん、私と宮澤さんと3人で1年おきに行ったんですが、こういった提案がもとになって歴史的資産の保存、活用みたいなのは進んでいった。

現在の世界遺産保存につながったというふうに言っていただいております、非常にこの技術協力っていいですか、交流事業っていうのはペナンにとっても良かったんだっていうのを痛感して、喜んでもらえて幸いだというふうに思っています。

さらにですね、当時一緒にやってたこの方が現在はペナン州のバターワース、反対側ですね、こちら側の都市の市長になられた。横浜市に来られたもう一人の女性のスタッフが、パタヤさんという方が、現在のペナン市の市長になっている。

ペナン州は2つの市しかない、2つの市の市長が全部都市デザイン室に縁のある方っていう珍しいそういった状態になっています。つい最近、2週間ほど前に私もまた行ったんですけども、今後とも横浜市および大学でもいいから一緒に連携してやっていただきたいと、そういう話ももらっています。

(活動を創造する)

都市のシンボルを作り残すといったような創造的なことですか、建築家の方に加わって頂いた地下の駅空間の演出の話ですか、いろんな事例が出てきております。そういう中で歴史的建造物のもっと効果的な活用の仕方をちょっと考えろという中田市長の指示がきっかけとなって、創造的な実験ということで、BankARTのような活動が2003年くらいから行われている。

当初都市デザイン室も関わっておりましたが、現在の文化観光局で創造都市活動として展開されている状態になっています。

作る、整備することから使う時代へというふうには、活動そのものを創造するというようなことですね、こういったものはここでお見せできないような活動があちらこちら、鈴木先生が担当されている黄金町も含めていろんなことが行われてきている。

今、40年以上かけていろんな局、あるいは民間、あるいは市民の活動が重なり合い、様々なところで常に横浜らしい地域、それぞれの地域のコンセプトをみんな意識してやっていただくということにより、横浜らしいインパクトは対外的に与えられるようになってきた、ということが大きい成果かな、と思います。

(今後の取組)

後半の議論になりますけれども、今後横浜は何をやっていくか、というようなことです。

みなとみらいをやったようなインナーハーバー地区ですね、さらにベイブリッジの向こう側も含めた展開を行おうとか、あるいは郊外区にもう一度取り組んでいこう、というようなこととかですね、いろんな目標が出てきております。

これは後半の、第二部の議論の中でまたお話いただければと思います。

私個人としては、さらに新たな骨格形成プロジェクトの発想と展開を目指していきたいということとか、やはり他都市を刺激するぐらいのことを横浜では続けていきたいとか、地域固有の産業の発展活用とか、市民との協働活動ですね、活発化させていきたい。

あるいは、専門家とか市民活動家の多様な視線を重ね合わせ、都市空間として飛躍する場の設置と運営。横浜は行政主導すぎるというふうに言われる方があります。でもまあ当初スタートはそうであったのはやむを得ないと思いますが、現在はいろんな専門家が外で活動されておりますし、市民の活動も活発になってきております。

そういう中で、共同で行うような研究センターみたいなものですね、亡くなられた北沢さんなんかはUDSY（横浜アーバンデザイン研究会）とかいろんな活動をされておりましたけれども、そういった活動が全国都市でも必要ですし、横浜でもそういうものを活発にするべきではないかというふうに思いますし、また日本だけでなくアジアをにらんだ活動、連携した活動ですね、そ

ういった視点、そういったものもやっていくべきではないだろうかというふうに思っております。

スライドについてはこれくらいで終わりたいと思いますが、横浜の都市デザインというものはやっぱり、もう一度いろんな事業を重ね合わせて行うようなムーブメントとしてやるべきだと思いますし、私たちが 40 年間やってきた中で、地域あるいは社会に対して新しい芽を投げていく、振りかけていく、それによりリアクションを受ける、地域の市民から受けるリアクション、あるいは専門家から受けるリアクション、そういったものがお互い作用しあって、どんどん新しい活動を作ってきたのではないかなあというふうに思います。

それが広い意味の都市デザイン運動・活動でしょうし、その担い手は横浜市の都市デザイン室だけではなくて、外部にいらっしゃる、今日来ていらっしゃる横浜のいろんな専門家の方々とかですね、大学の方々、そういった方も含めてムーブメントになっているのではないかと。

これはもうなりつつあるんで、それをもう少し鋭く見せていくというんですかね、成果を訴えていく、というようなことをやっていきたい、いくべきではないかなあというふうに感じております。

以上で、駆け足です、40 年を振り返ってお話いたしました。(拍手)

○司会

ありがとうございました。では今の講演を踏まえて、佐藤さんと西村さんから横浜の外から見たご意見などをいただきたいと思います。

○佐藤

(都市デザインのストーリー)

1998 年の第 2 回ヨコハマ都市デザインフォーラムの国際会議の時に、会議が終わったあとにジョナサン・バーネットとウェイミング・ルー、2 人が寂しそうにしてて、それで一緒に寿司食べに行った思い出があるんです。

ウェイミング・ルーのポートランドっていうのはすごく分かりやすいストーリーなんです。彼は山水都市って台湾だから、ポートランドも山水都市ってぴったりするかどうか。でも自分はアメリカのなかで東洋人として調和のような精神みたいなものは感じるんですよ。

ジョナサン・バーネットはその時はタイに行ってたかもしれないけどニューヨークを中心にやって、ものすごく戦略的な思考をする人で、そんなようなことをダイナミックにやっていた。

アラン・ジェイコブスはサンフランシスコで、都市計画局長として都市デザインをやった。その時にアプリアムンドルという女性と一緒に学生をまきこんで作った図面なんていうのはね、A0 の大きい図面が地区ごとにあって、すごいデザインのことを、地区ごとに描いてるんです。あんまり見せてくれないんだけどある時見せてくれて、僕もこんなに巻いたのを貰ってきましたけども、彼自身がデザインした都市計画と結びつける非常にストーリーとして分かりやすいものでした。

だけど横浜の今の国吉さんの話を聞いてても、たくさんやってるなあって、いろいろやってると思うんだけど、何かやっぱりストーリーが見えてこないところがあるんです。

(まちづくり的都市デザイン)

田村明さんが「まちづくり」という言葉を私が作ったんだとよく言うんだけど、それにはも

のすごく違和感があるわけです。でも良く考えてみると、そういう日本が広い意味で作っていった「まちづくり」って、港北（ニュータウン）の時にマネジメントしていったり、プロジェクトから初め、それを段々組み合わせていってデザインのことを入れる、そういうプロセスはやっぱり大きなまちづくりなんだと思います。まちづくり的都市デザイン、そういうことも出来るのかな。

横浜はあんまり表に出してないですよ。例えば学者がいろいろな日本の事例を海外に話す時に、あんまり横浜のことを話そうと思わないんじゃないかと思うんです。地方都市の金沢とか固有なものは非常に話しやすいけど、横浜のことはあんまり話そうという気にならないし、まとめてもない。

だけど今のこの時代になって、横浜っていったい世界的な都市デザインのプロセスの中でどんなものだったのか、本当にそういうものはある意味ではアジアの一つの代表としての横浜っていう、それが世界の都市デザインの30年、40年の時代の中で、どういうものだったのかをもう一度ちゃんとストーリー付けて考えてみる必要があると思うんです。それが何かっていうのは、「まちづくり」っていうのがキーワードかなとは思いますが、まだまだもっと深いものがあるんじゃないかという気がします。

○西村

（日本型の都市デザイン）

結構厳しい意見が出ますけど、私は横浜の都市デザインって変わってきたと思うんですね。それは、日本の都市デザインそのものに二面性、矛盾があるからです。

例えばこのスライドで、これはある一つの日本的な都市デザインの一つの方向性だと思うんですね。つまりコントロールと、でっかい大きなプロジェクトと、細々としたところを押さえていくようなデザインと、この3つを総合的にやっていくということですよ。その方向性もかなりはっきりしている。ここに一つの日本型の都市デザインの方向は見えたと思うんですね。

ただ難しいのは、これは横浜だけじゃなくて都市デザインそのものが持っている、内在と矛盾っていうか両面性があると思ってるんです。私自身も東大の都市工学科の都市デザイン研究室って言うくらいだから都市デザインというものの何ですかって問われるわけですね。その時に非常に悩ましいのは非常に大きな、矛盾みたいなものなんです。

（定期的な改題への対応と長期的な目標）

例えばどういうことかって言ったら、例えばこういう時代でもこういうことがやれたのは都市デザイン室にお金があるわけじゃないんで、権力があるんですね。権力をもって、こういうお金を持っている事業部局に、もっと上に立って何か動かしていくとかね、土地利用コントロールは別の都市計画の部局がやるわけだけど、それに対してもっと違うところから網を被せられるみたいなね、ものすごく権力がないと出来ないわけです。横浜でもやっぱり政権が変わったりいろんなことが変わると続くわけじゃないんですね。また事業部局もそれぞれに作業の中で一つ一つ知恵がついてきて、わざわざ都市デザイン室に言われなくたっていろいろやれるようになってくるわけです。

今日の国吉さんのお話にもあるように市長が変われば政策も変わるし公約も変わるわけだから、組織の中の構造も変わるわけです。そういう中でどういうふうにして生き延びないといけないのか。

ただ都市デザインは、これもおっしゃったように非常に長期にかかるわけです。首長が変わったり、予算の重みづけが変わったりする中でも、ある一貫したものを持ってないといけないとい

う意味では非常に矛盾しているわけです。だから長期で何かやらなきゃいけないけど、定期的な
いろいろな問題の中で難しい。

(目に見える都市デザインと見えない都市デザイン)

都市デザインっていうのは具体的に、今日もある意味地域コーディネーター的役割があるとお
っしゃったわけだけど、でも出てきたスライドは最終的なアウトプットとしての物なんです。

それはやっぱりやむを得ないところがあって、スライドにはコーディネーションとか裏で動い
ているところはあんまり表に出ないです。最終的に出た形があるけど、形をデザインしてるのは
都市デザイナーでは必ずしもなくて、それは建築家だったりそれぞれの造園家だったりするわけ
ですよ。そういういろんなものを束ねてコーディネートしていくわけけども、最終的には物
で語らざるを得ないと。物を作っているのはまた別の人である。その辺の二面性もある。

(都市デザインの匿名性と顔)

それともう一つの二面性は、例えば物にしても、例えば建築だったらこれは最終的には建築家
の顔が見えるから、最終的な誰がデザインしたっていうのが分かるけど、都市デザインは誰がデ
ザインしたって分かるのはあり得ないですよ。そういう人のコーディネート役だったり。しか
しでもそういうところに都市デザイン室っていうある種の人格みたいなものが見えないと何をや
ってるかが外に対して発信できない。だから人格があるからスタートできる建築と、なかなかそ
うはいかない都市デザイン。

しかしでも都市デザインが情報を発信するためにはきちんとした都市デザインの顔が必要で
すね。それが国吉さんだったと思うんですけど、そういう意味の矛盾っていうか二面性っていうの
もある。

国吉さんの存在そのものがやっぱりある種横浜の中では非常に特殊だったわけです。だって同
じポストにずっと居続ける人っていうのは普通の仕組みだったらあり得ないわけなので、そうい
う意味でいうと一つの顔を持ったデザイン、都市デザインっていうのがなかなか外に対して伝え
にくい。でも国吉さんがいらしたからそれぞれの様々な都市とつながったり影響力を持て
たりとか、そういうことがあったと思うんですね。

その意味でコーディネートって市役所の中の人事の仕組みの中で、それとは違う一貫した都市
デザイン、人格を持った都市デザインみたいなものをやらないといけないという矛盾っていうの
はね、それも両面性だったと思うんです。

(都心と郊外ー日本の都市デザイン)

それからもう一つ言うと、今日のスライドも大半は都心のスライドですよ。国吉さんご自身
がおっしゃったように郊外のこともやられてはいるけど、やっぱりかなりの中心は都内に限定せ
ざるを得ない。それは横浜にとっては一番の中心だから。

都市デザイン室は都心デザイン室であるかというような言い方があってね、それぞれの地域の
拠点がそれぞれに頑張っていくのも大事なんだけど、横浜市都市デザイン室がコミットメントし
ていくのが難しい側面もあると思うんですね。それもおっしゃった通りだと思うんです。そうす
るとやっぱり都市デザイン室的なものが各区の中で生まれてくるような、分権的な仕組みみたい
なものが必要かもしれない。

しかしそうなってくると都市デザイン室の先鋭的な尖がった部分が見えにくくなりますよね。
郊外に行こうとすればするほどなかなか尖がれない、やっぱりその二面性もある、というよう
なところで非常に難しいバランスの中でやっていけないといけないっていう、これはある意味日本
の都市デザインの持っている一つの性格かもしれないです。

国によってはある種、首長がすごい権限でいろんなことをやれたり、予算の枠組みなんか変え
たらそこで動いていってしまうってことがあるかもしれない。日本の場合縦割りの中で予算がか

つちり決まっているので、なかなか大きく物を動かしていくっていうのは出来ないっていうことがありますね。

ですからある意味日本的な都市デザインっていう、一つの大きな性格なのかなあって思って、別に私は否定したりするつもりは全くないんですけども、こういうものを持たざるを得ないんですね。そういうものが日本の都市デザインにはあるのかなあって、つくづく今日聞いてて思いますね。

○国吉

ありがとうございました。かなり綱渡りで戦略を考えてきた、という感じがあると思いますね。日本の場合、都市デザインとか都市空間の活用を継続的にやるっていう国全体としての下地がないわけですよ。横浜はたまたまある程度スタート出来た、これを何らかのかたちで市長が変わっても継続すべきではないかと、というのが田村さんとか岩崎さんがいなくなられた後のメンバーの願望だったわけで、その中の綱渡り的な、やり方も含めてですね、やっていかざるを得なかったというのがあります。

継続っていいですか、都市デザイン室が継続出来た、だから私もずっと居られたっていうのが、いろんな面があって各局に邪魔な存在だけでは必ずしもなくて、各局が困った時に、極端に言うと、批判されると、いやいやあれは都市デザイン室がやってるんですよと都市デザイン室を一応、何と言いますか逃げ道にして…。

でも、そのくらいは背負いますよという感じで、いろんな空間的なものの情報については良きにつけ悪きにつけて責任は取りますよ、というくらいのもを持っているとですね、それはいろんな政権の時代でも一応役には立つんだということがあって、そういう覚悟はみんな持ってたと思うんです。

ですから高秀市長も、これは誰がやったんだって言ったら、どこかの局長が国吉さんでしょうと、とか言って私のせいにされて、それでみんな納得しちゃったとか、そういうこともあったんですけども、それも一つの信頼の証しなんですね。そういう役割というのは、やっぱり個人名ではなくてね、そういうところを背負う組織もあっていいんじゃないかな、継続していくと思います。

○佐藤

それが第二の国吉さんが現れたり、他の都市にもそういう人が現れるような人事制度になっ
ないじゃないですか。

○国吉

それはこれから先ね、政策として背負えるように。

○佐藤

やってもらいたいと思います。

○国吉

それともう一つ、佐藤さんの話であったんですけど、ヨーロッパ、アメリカ的な論理的な説明の仕方はあんまりないというところはあるんですが、逆に言うと韓国なんかでは非常に親しみを
持って受け止めています。横浜の都市デザインのあり方は非常に分かりやすいということで、ア
ジアの都市システムの中でいろいろ乗り越えてね、文化として都市デザインが定着していく中で、
一つのやり方として非常に評価されたりしているところもありますよね。

○佐藤

それから横浜って、自立っていうことが出てきますよね。首都圏整備基本計画を作る時に、首

都圏整備委員会で議論している時に、横浜と川崎って東京から切り離されて、グリーンベルトで切り離されて、「衛星都市」って原案で出てくるわけです。それに対して横浜はものすごく反発をして、それで「既成市街地」になったんです。それは要するに衛星都市ではないけれども東京と一緒にということではなくて、東京と同格だという、それで自立的なものを目指している。

やはり東京と対比する、ある種のそういう場所があって、東京はやはり中心だから正当にやってなきゃいけない。そういう位置にあって、この場というのをみんな使っていたような感じがします。

国吉さんも、もちろん何でも出来そうだと思うだろうし、六大事業も、ああいうプロジェクトを推進しながらいろんなものを進めていくのが出来そうだと、今日見せていただいてもいろんなものが、東京都じゃできないけど横浜だから出来ると、ある種の場として考えて、それでいろいろやりたい事をやる。

継続がすごく難しかったと、確かにそうだと思うけど、外から見れば予定調和的に継続している、非常にうまく継続してるっていう感じがします。

サンフランシスコでは市長が変わったら全然駄目で、アラン・ジェイコブスなんかはあいつはひどいって言うしかないという、でもそんなことはないわけですね。外から見れば予定調和に見える中で頑張ってる。だけど大きく見ると、やっぱりそういう力っていう、場が持つてからっていうものを感じましたね。

○国吉

飛鳥田市長から細郷市長に替わった時は多少軋轢がありました。企画調整局っていうのは飛鳥田さんが設置してますし、田村さん自身が市長選の候補にあがったりしてましたから、次の細郷市長としてはやはり煙たい存在で、そう思っちゃうとなかなか上手くいきませんよね。だから田村さんも継続したかったけど出来なかった。法政大学に行かれちゃったんですが、企画調整局っていうのはなくなって都市計画局に移って都市デザイン室になるわけです。

ただ一番大きかったのは、しばらくして関内の地元の人たちですが、神奈川新聞なんかにどんどん書いて、新しい市長はもっと都市デザイン室を使うべきだっていうことをどんどん書かれたんですね。それはびっくりしました。地域の方々が市長に会うたびに言うとか、そういうのがあったのは次の継続につながったような感じで、そういうのが出来たっていうのが嬉しかったですね。

○西村

二つあって、一つは佐藤先生がおっしゃったような意見ですけど、横浜は国に楯突くくらいのは出来る規模と財政力を持っていた、持っているっていうことはすごく大きいと思うんです。

例えば高速道路を地下化するとかね、決まってるものをひっくり返すとかね、高さ規制、31メートルの規制が容積率の導入によってなくなった時にも、横浜市は31メートルを維持し続けましてね、こういうこと普通の小さい町とか市ではあり得ないです。

国に真っ向、対立するようなことをやっていく、それはやっぱりそれだけの規模も大きいし、組織としても強いということがあったと思うんですよね。そこに田村さんみたいな、本当にやる人がいて動いたっていうことが非常に強いと思うんです。

それともう一つは、300万人超えるっていうのは県でもあんまりないわけだから、非常に巨大な組織なんだけど、でもやっぱり例えばトップとそれぞれやってる人の距離が近いわけですね。つまりある種の意思決定は今日来られているような副市長はじめね、本当に市のトップの方々の距離が近いから、それは横浜のもしかして非常に、政令市であることも非常に強みなんですね。

県だとなかなかこうはいかないし、東京都でなんか…意思決定がどうなってるか、とにかく中に入ると右往左往しますからね。だからそんな意味で非常にコンパクトにものが決められるということがあって、そこが非常にこうした大きなビジョンを持ったっていうことが大きかったって思うんです。

もう一つ言いたいのは、今日ペナンの話も出ましたが、私はアジアにおける都市のこれからを考えるときの一つの非常に有力なモデルであると思うんです。つまり劣等生の都市計画なんですね。つまり経済の方が無茶苦茶先に行っていて、後からヨタヨタ規制の方が動かなくちゃいけない、スタッフもいないし、政治もそんなにリーダーシップを発揮できない、というようなことが多いわけです、欧米に比べると。ですからそういう中でもやっぱり曲がりなりにもやっていかなくちゃいけない。

そんなに 100 点を狙うような、つまり全てを規制して全てのことを許可してね、全てコントロールして押さえつけるっていうことは恐らく出来ません。欧米だったら土地利用のコントロールもありますけど、やれるわけですよ。しかし、そこを 100 点じゃないけど、でもどこのツボを押さえたら先に進むかとか、市民をどういうふうに味方につけると先に動いて行けるかとか、戦略を立ててやれるところからやっていって、でもじっとしてたらやれないような地域の流れを作っていくとかね、そういうことをずっとある意味都市デザイン室の戦略はシフトしていったと思うんです。

そういうことはアジアのものすごく経済圧力が強くて、地価もものすごく上がってて、何言われたってなかなか動かないところで、何か動かして、でも都市を何かいい方向にイメージをちゃんと見せて、例を見せていくという意味では、私はものすごく意味のある宣伝になり得るし、これからもアジア全体に対して情報を発していく、そういうことがありますね。

○国吉

そういう意味では最初のリーダーの岩崎駿介さんの発想の中に、理念だけでつっぱるのは通用しない、あるところで緩める部分と保つところと、両面持たないとやっていけないんだっていうのはかなりありましたね。

○佐藤

政令市っていうのはある意味で非常に恵まれた都市であって、日本でも似ているところで言えば神戸に似てるじゃないですか、他の政令市も今すごくがんばってます。仙台もそうだし、札幌なんかも。横浜でしか出来なかったことは何なのかっていうのをやっぱり浮き彫りにしていくっていうのはすごく大事な作業なのかなと思います。

ある種のタレントが内部にもいて、外にもいて、市民のいろんな組織がバックアップするのはいろんな都市でもあると思いますが、だから横浜でしか出来なかったことは一体何かと考えていくと、それがすごく横浜的なものだという事になってくるのではないかと感じます。それはたくさんあるよ、全部そうだよって言いそうだけど、でも本当に何なんだろうって。でも神戸なんかと比べると似てるところありますよね。だけどもあっちにはそういうタレントいなくて、中にはいない、外にはいるけれども。

○西村

横浜のすごい特色は、様々な分野の例えばアーティスト、建築家とか、今日来られてるね、ネットワークがすごいじゃないですか。そういうものがやれてるっていうのは他の都市ではあんまりないですよ。

やっぱり東京に近いっていうのと、風通しがいいから…他の都市だとなかなか動きにくいようなことが、例えば建築家を指名するなんてことがね、それは例えば国吉さんのような方がいて対等に付き合えて、建築家にも文句言えるようなね、そういう人って他にはなかなか居ないわけです。

そんな意味で、そういうネットワークをすごくやったっていう、強いっていうのはすごい特色だと思うんです。それは逆に言うと都市デザイン室が結構融通無碍で、そういうタレントで動いているところがある。

都市デザイン室的なものが日本にはいくつかのスタイルがあっただけ、一つは条例を持ってて条例のお世話係なんていうのもあるわけですね。景観条例持ってて、景観条例を審査します。何かもう定型なことばかりやってる人っていう、そういうこともあるわけです。それからある地区を持ってて、この地区は私たちがやっています、みたいな、プロジェクトをやっています。

でも横浜は地区的には都心がそうかもしれないけど、かなり融通無碍で、もう少しデザイナーと一緒にやったり企業と一緒にやったりとかいう中で、下手に定型化しないところが上手いバランスの中で、立ち位置を考えておられるなと思うんです。定型化したほうが仕事としては楽なんです。自分たちのお城はここだと言えるから。でもお城はここだと言うと他のところには出張っていけないから、まるでそこの中だけになっちゃいますよね。

だから他のところにいろいろ口を出せる、口を出しても聞いてもらえるような力関係を持っているっていうのは本当に融通無碍でね、ある種そういうものを大横浜の中で、守っていけるかっていうのが非常に重要なのではないかと思います。

○国吉

ありがとうございました。融通無碍な若い人、たくさんいますからね、すごい期待しています。まだ話を続けたいんですが、向こうから表示板が出てきておりますので、第一部をこれで終えたいと思います。お二方には第二部の中でもお話いただきたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会

三人のみなさん、どうもありがとうございました。ではここで第二部の準備のために、しばらくの間休憩とさせていただきます。

【第2部】 ラウンドテーブルディスカッション「これからの都市デザインが目指す方向」

【ミニレクチャー】

- ミニレクチャー1 50年後の横浜の姿 鈴木 伸治／横浜市立大学准教授
ミニレクチャー2 モビリティデザイン 羽藤 英二／東京大学准教授
ミニレクチャー3 コミュニティデザイン 山崎 亮／studio-L代表、京都造形芸術大学教授

○司会

では皆さまお待たせいたしました。第二部を始めさせていただきます。

第二部はミニレクチャーとラウンドテーブルディスカッションです。ここからは、これからの都市デザインが目指す方向について議論していきたいと思います。

まずは議論のきっかけとしてミニレクチャーを行います。横浜市立大学准教授の鈴木伸治さん、そして東京大学准教授の羽藤英二さん、studio-L代表で京都造形芸術大学教授の山崎亮さんからそれぞれ、議論のための話題を提供していただきます。まず始めは横浜市立大学准教授の鈴木伸治さんです。

鈴木さんは、横浜の都市デザインが専門分野です。横浜市創造都市アドバイザーであり、本日共催の大学まちづくりコンソーシアム横浜の代表委員でもあります。では鈴木さん、50年後の横浜について、ミニレクチャーをお願いいたします。

【ミニレクチャー1 50年後の横浜の姿 鈴木 伸治／横浜市立大学准教授】

○鈴木

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介に預かりました横浜市立大学の鈴木です。

横浜市大の鈴木というよりは、大学まちづくりコンソーシアム横浜、こちらの代表委員として、コンソーシアムで取り組みました「海都横浜構想 2059」、こちらをご紹介させていただきたいと思います。

メンバーの方は、東京大学の、亡くなられました北沢猛先生を中心にこのプロジェクト自体は立ち上がったわけですが、その後私が代表を引き継ぎまして横浜国立大学の北山先生、野原先生、神奈川大学の曾我部先生、関東学院大学の中津先生、東京大学で北沢先生亡きあとは清家先生に引き継いでいただいて、横浜の開港 200 年、その時の都心臨海部の姿を描こう、というプロジェクトをここ数年取り組んでまいりました。

範囲としては、対象地域として約 3200 ヘクタール、陸域で 2000 ヘクタール、水域で 1200 ヘクタール、居住人口現状で 11 万人、従業者数、働く人の数で 36 万人という非常に大きなエリアです。

これまでの横浜の都市づくりを振り返ってみますと、横浜には様々な資源があります。日本の近代を支えた様々な蓄積がこのエリアにはありますし、海を中心とした都市という非常に特徴的な空間でもあります。しかし一方横浜も非常にたくさんの問題を抱えています。

人口減少、少子高齢化の問題は他都市に漏れず、これから経験していきますし、生産人口や雇用機会の減少、特にですね、東京に吸引される活力といいますか、仕事はやはり東京が多くて、横浜は寝て暮らす場所であるというような、やはりそういう位置づけからなかなか脱却できていない。これは 1960 年代以降ずっと抱えている課題でもあるわけです。

都心臨海部、インナーハーバー、こちらの課題について考えてみますと、やはり京浜工業地帯は日本のものづくりの非常に大きな役割を担ってきたわけなんですけれども、産業構造が変わっていき、都市がグローバル化する、産業がグローバル化する中でやはり新しい産業をこの京浜臨海部に育てていくことが不可欠である。

それから港の物流の競争というものは非常に激しいものがあります。かつて横浜は全世界のコンテナ輸送数のランキングで 12 位であった時代もありましたけれども、現在ではもう 30 位近くになっている。やはり激しいアジアの港湾物流拠点間の競争の中でどう勝ち抜いていくのか、そういったこともすごく重要になってくるわけです。

少し話題を変えまして、横浜の都市づくりの歴史を振り返ってみますと、横浜の歴史というのは実は非常に計画的に都市を作ってきた歴史でもあります。

いわゆる開港を迎え、まちが整備されていく、様々な技術が導入される、プラントンなどが居留地のプランを描いた、その上に都市がどんどん出来上がっていく。

明治の後期、それから大正に入りますと、工業、港湾といったところに力が入っていくわけですね。こちらは 1927 年に書かれた大横浜建設計画の図ですけれども、港を中心に、都心としての関内細部とそれに対峙するかのよう京浜臨海区が発展する、港を中心とした一つの都市が出来上がっていく姿というのが描かれているわけです。

戦後は、1965 年に田村明先生を中心に検討されたこの 6 大事業構想というものが実際に実施されて、二つの都心を一つにする、というようなこの有名な図面なども皆さん見たことがあるものだというふうに思います。

そして、これは 1965 年当時の都心臨海部の姿ですが、2008 年の図を重ねてみますと、ほぼ田村先生らが中心になって示した 6 大事業というものの方向性、その中の都心部強化事業というものがほぼ完成を見せつつある、ということがこの写真を見てお分かりになると思います。

2004 年には、創造都市横浜ということでナショナルアートパーク構想というものが提案されております。

改めて我々は何故 2059 年、海都横浜構想を作ったのか、ということを確認しておきますと、これからの社会というのは非成長、それから縮退の時代を迎えつつあるということ、そしてこれからの横浜というのは港湾機能の変化や羽田の国際化への対応等、様々な問題に対処していく必要があるということです。

これは人口ですね、2055 年には 50 万人口が減る、50 万都市が一つ消滅するという状況を迎えるわけです。羽田が国際化するという、これによって横浜の都市の立地というのは大きく変わるわけですね。それから港の中心というのもインナーハーバーのエリアから外縁部の南本牧の方に今少し移ってきていると、そういった中で都心臨海部の将来像を考えようということになったわけでありませう。

まず最初に人間中心の都市、持続可能な環境、そういったところに焦点を当てて、水を囲み多様な人々が暮らし働く、リング状の都市というものを我々は構想いたしました。

水面を最大限活用して、水上交通をこれからは活用していく、新たな L R T のような新交通を導入する。そして既存の交通網、このリングを接続させていく、そして市街地と一体化していくという方向性です。

それから臨海部には、なかなか人の生活というものが入っていかなかった部分がありますけれども、そういった中に新たな産業や、あるいは外国人の方が暮らせる場所、あるいは外国の企業が積極的にここに移転して貰えるように、誘致するような場所、そういったものを作っていく必要があるだろうと。それから次にエネルギー問題です。自律分散型のエネルギーシステムですね、

それをリング状にネットワークさせていくことで安定したシステムを実現する。環境面ではヒートアイランド対策としての浜風や、それから水質、生物多様性の復元なども必要とされている、というふうに提案いたしました。

今日は時間がないので、部分的なパースをですね3か所だけお見せいたします。横浜港の中心にあるこちらの瑞穂ふ頭ですけれども、横浜のインナーハーバーのど真ん中にはまだ米軍による接收地があるわけです。こちらを返還後は、緑と国際交流の拠点、インターナショナルパークというふうにすることを提案します。水辺と緑を生かしながら、各国がパビリオンのようなものを持って、そこで日本の国と他の国が交流できる、そういう場にするということです。

もう一つが、こちら山下ふ頭になります。こちらは既存の倉庫をリニューアルするかたちで、ふ頭の再開発ではない、むしろ保全型の開発というものを提案しております。新たな市民に公開された水辺の広場や、創造産業、今横浜市が一生懸命育成しようとしている、そういう創造産業の新たな場となること、そしてマリーナ式住宅など、これよりも一つ、ワンランク上の居住環境と質を持った水辺の住宅地というものを提案させていただいております。

こちらは大黒ふ頭ですけれども、こちらは羽田が国際化されると、第二の横浜のゲートウェイというふうになるわけです。例えば羽田から車あるいは船でやって来て大黒まで来て、そこからさらに横浜に入ってくるというようなことも出てくるのではないかなというふうに思います。

これらの提案づくりを通して、いろいろ考えたわけなんですけども、やはり 50 年後の横浜、単純に首都圏の一地方都市という位置づけではなく、やはり東アジア共同体など国を超えた都市間ネットワークの顔、要となるような、そういう都市になって欲しいということ。

そして横浜の都市としての自律性、求心性、そういったものを改めてやはり考える必要があるのではないかとということですね。

また環境面では超低炭素社会のモデルゾーンとなることや、都市の活力、エンジンとしての役割をどのようにこれから先の都心部が果たしていくのかということがポイントになるであろうということ。

それから横浜港、港という面でいいますと港湾物流機能、国際的な競争の中で、きちっと生き抜いていくためにはインナーハーバーとアウターハーバーの役割分担をしっかりと、インナーハーバーの部分、より市民に開かれた海の都の都心空間とするということを提案させていただきました。

この提案は、我々大学のメンバーが提案させていただいたもので、これが実際の市の公式なものでも何でもないので、我々としてはここで提案したもの、そこからまた議論を始めて、今後の 50 年後の横浜の姿というものがより開かれたかたちで議論され、特に市民の方からの意見をいただきながら皆で都市の将来像を考えていければ良いのではないかとというふうに考えております。

ご静聴ありがとうございました。

○司会

鈴木さん、ありがとうございました。

では次は東京大学准教授の羽藤英二さんに登場してもらいます。羽藤さんの研究分野はモビリティデザインです。横浜モビリティプロジェクトゼロ、交通部門策定アドバイザーでもあります。羽藤さんお願いします。

○羽藤

私のほうからはですね、モビリティデザインというお題を貰っていますので、これについて話そうかと思ったんですが、事前に第二の国吉さんと呼ばれるような方々からですね、どうも悪役がないので、ちょっと茶々を入れるようにと指示を受けましたので、少し違う目線で話してみます。

最近、3月11日から被災地の方に入っています。この土地の場合、これまで延べで50日か60日くらい現地に入っているかと思います。こういう現場を目の当たりにした時に、果たして今日のお題の都市デザインというものに何が出来るのか、ということを変更して本当に強く思います。

都市デザイン室が出来て40年という歴史ですが、この中で、幸運なことに関東直下の大地震というものを体験したことはありません。ではそういうことが起きた際に、今まで都市デザイン室は果たして非常に豊かなオープンスペースを作り、横浜の中に素晴らしい回遊空間を作り上げてきたわけですが、この空間が被災時のパブリックあるいはセキュリティという問題に対して反応し得るのかというようなことを思わざるを得ないということです。

デザインが想定している射程があります。デザインの時間が一体どれくらいの範囲を果たして想定したものなのか。先ほど50年という話の中で、山崎さんと50年なんて明日の経済のことも分からないし、デフォルト不履行とかいろいろある中でどうなんだという話をしていました。しかし何か最後に形に残す、形をつくるという仕事の中で、我々はそれでも何かを想定しなければいけない。そういう中でややもすると生を謳歌する、それそのものは素晴らしいことなんだけれども、そこにある側面からみれば偏った空間デザインを想定として強めすぎたのではないかということをお自身は最近感じています。

今よりも未来は良くなり、他人よりも自分が大切である。これが我々を支配してきた近代の価値観だろうと思います。ところが現実には被災地に行きますと、今よりも未来が良くなるわけでもない、あるいは自分よりも他人の方が大切である、そうとしか思えない、そういう価値観が一般的に受け入れられている。このような状況の中で、震災を経験していない組織、都市デザイン室に何がこれから求められてくるのか、というようなことを一つアンチテーゼとして投げかけたいと思い、このスライドを用意しました。

次にですね、ちょっと禍々^{まがまが}しい感じで、全く真逆のベクトルで信時さんが好きそうな感じ(笑) …ですが、サルゴジのグランパリのプロジェクトの話です。

サルゴジはですね、フランス大統領ですが、フランスのGDPの3分の1を稼ぎ出しているパリに投資することはフランスを強くすることだという価値観のもとにグランパリプロジェクトというのを打ち出しています。

彼は、エコロジー、交通戦略、郊外開発、この3つくらいに焦点を絞ったプランを出しています。その大きな特徴のひとつは、50万都市を20個作ると言っているということ。都市スケールの再編ですね。自治の単位を変えるということです。

この話をすると必ず土井さんの横浜1万人1区365区でやったらどうかとかですね、そういったちょっと数字のお遊びみたいに聞こえるかもしれないけれども、今の横浜の自治のスケールが果たしてどうなんだということをこれと比較して見るとおもしろいかもしれないと思います。

あるいは今よりも引きで横浜を見た時にどう見えるかについてですが、セーナ川首都圏ということでパリ、ルアン、ルアーブルという三都市によるセーナ川首都圏という構想がある。横浜と

川崎で連携しているんなことやる、前々から私も言ってるんですが、500 万人都市圏くらいになって東京に対抗できるんじゃないかと、数合わせですけどね。ただこれは流域圏構想というかたちで見るとパリは別に、ルアン、ルアーブルと連携なんかしなくても良さそうなもんだけど、敢えてこういう新しい地域連携軸という地域のくくり方を提案している。

パリは現状で十分魅力的な都市かもしれないけれど、こういう新しい空間デザイン案が提示されている。あるいは都市内においては、「遅い交通」と呼ばれる提案もあります。

私がやっているのはモビリティデザインということで交通が専門ですが、従前比較的速い交通ばかり焦点を当てて経済の効率を追ってきた。

ところが首都圏域では 65 歳以上の世帯主が 2050 年今の 3 倍になります、65 歳以上の世帯主がこのような地域に沢山いて、かつお子さんが二人いる 4 人家族は今の 6 割になります。

こういう状況の中で身近な生活圏の移動、遅い交通をどのようにしていくかということが非常に重要だということだと思っています。こういうものへのシンボリックな投資が、横浜はもちろん進めてきたわけですが、海外においても非常に盛んになってきているという背景があります。

19 世紀、鉄道もなければ車もない状況の中で牧歌的な暮らしが行われてきたところに、メガストラクチャーである高速道路あるいは鉄道が挿入されることで都市が外延化し、開かれて行った。これは同時に土地性の喪失を招いたということです。

ところが 21 世紀になって情報化が進み、高齢化が進み、生活圏がどんどんどんどん縮小していく中で、都市の形態が 2050 年というものを想定した時に恐ろしく変わる可能性があるということをお自身強く感じています。

北沢先生がまだご健在だった頃に、羽藤くん、ちょっとちょっとというふうに研究室に呼ばれまして、横浜のインナーハーバーで何か考えてって言われました。

その時に、カーボンゼロ、低炭素でモビリティの私有を止める、全てのモビリティがシェアされる、電気自動車とかそういうものですね、そういうのを想定して描いた図で、私たちの研究開発の中ではモビリティクラウドと呼んでいます、こういう仕組みの実装可能性も横浜にはあると思っています。

ヨーロッパでは都市のコンバージョンというかたちでアーバンデザインが進められています。古い土地性、城壁があってその中に都市があって、それがどういうふうにコンバージョンしていくかっていうことでやられてるわけですが、一方アジアの場合は、こういう制約条件が比較的薄い、薄くてかなり大胆なプランがあります。

最近私が関わっている鄭州の 400 万人くらいの規模、横浜とちょうど同じくらいのスケールです。こういうところと横浜はある種競争していくのか、いかないのか、ということをお対外的には問われている。対外的には問われているというのは投資という側面あるいは雇用という側面で問われているということです。

鄭州に昨日まで行って、アーバンデザインとモビリティデザインの話をやってきたんですが、この中でマイクロシミュレーションを使って、モビリティクラウドですとか、パーソナルモビリティを入れると、CO2 の排出量がどうなるとか、利便性がどうなるとか、エネルギーマネジメントがどうなるとか、こういうことを評価しています。

コンピュータークラウドは大きなデータベースサーバーがあって、それに全てのモビリティとエネルギーに関連したデータが入る、そこにユーザーがアクセスする。

全ての交通機関が私有ではなくて共有される。そういう概念はダイムラーだったりあるいは様々な自動車メーカーも既に提案していますが、そういうクラウドの OS、モビリティを運用し、エネルギーマネジメントと連動したオペレーションシステムでこれからはやっていくんだという

ような概念が最近は出てきています。

その端緒は、バルセロナの自転車共同利用のサイクルポートですが、こういうものを設けることで自転車を私有していなくてもどこでも借りれてどこでも乗り捨てできるじゃないかと、横浜にもベイバイクってありますね。こういうものがこれからどういうふうに進化していくのか、ということが重要だということです。

このあたりでまとめです。都市デザイン室の 40 年が長いか短いかということが、ここにおられる会場の全ての人に問われているということだろうと思います。

東京駅はこの 100 年全く形を変えていませんが、形を変えていない中で鉄道の路線を何本も何本も同じアーキテクチャーの中に組み込んで生き延びてきています。そういうアーキテクチャー、長い時間の間存在を変えず、かつ新しいものを組み込む可能性を受け入れるアーキテクチャーを都市デザイン室が提案できるかということを、このスライドで問いたいと思っています。

モビリティデザインとは関係ないと感じるかもしれません。紐帯、つながりですね、これが私自身これからアーバンデザインにおいて大事になってくると思っています。個人社会、市場社会、公共社会、地縁血縁の社会があって、開放的で閉鎖的。意味があって形式的という軸がある。この 4 つのネットワークの中で我々はアーバンデザインあるいはまちづくりを行ってきた。この中で今後強調されてくるであろうネットワーキングは、第一象限の個人社会であると思っています。

私も **common** が力を発揮するとか、**market** が重要だと言いたいんですが、時代というのは、**private**、個人がいかんして創造性を発揮し得るか、そのための市場であり、そのための **common** であり、そのための **public** というような見方があるのではないかと感じています。

これらのネットワークが従前のように単独で存在しただけでは被災地の現場などでは、ナイーブであるということも同時に感じています。いくつかの関係性は繋がらなければ効果を発現し得ない。**private**、**private** でいって見た挙句、公が失われていっては身も蓋もないでしょう。地域安全保障のための空間とは一体何かということをお我々問わなければいけないでしょうし、あるいは新しい **common**、ちっちゃな共同体でもいいし、いくつかの **common** を効率的に運営してく仕組みでもいいし、そういうものためのアーバンデザインもあるではないでしょうか。

また、市場の力を上手く利用しながら **private** を効率化していく、そういうやり方もあるかもしれません。

4 つのネットワーキングの効率性をいかに高めていくのか、あるいは質的に深めていくのか、これは目に見えない新しいデザインです。都市デザイン室のこれからの、ずっと続いて行くことだと思いますが、未来に向けてこういう考え方が必要ではないだろうかということで、私から話題提供させていただきました。以上です。

○司会

羽藤さん、ありがとうございました。

ミニレクチャー、最後の登場です。studio-L 代表であり京都造形芸術大学教授の山崎亮さんです。山崎さんはランドスケープデザインから現在はコミュニティデザインをテーマにまちづくりを実践していらっしゃいます。山崎さんにはコミュニティデザインについてミニレクチャーを行っていただきたいと思っています。お願いいたします。

【ミニレクチャー3 コミュニティデザイン 山崎 亮/studio-L代表、京都造形芸術大学教授】

○山崎

改めまして山崎です。どうぞ宜しくお願いします。羽藤さんには感謝をしたいなあと思うんですけど、まず襟がついてない服を着てきちゃってどうしようかと思っていたら、前にこういうTシャツとだらっとした格好してくれる人がいると、すごく有難い（笑）。もう一つは、ソウルだとか、ものすごく大きな何百万という都市という話が出てきちゃって、僕はもう今日喋ることないかもしれないなあと思っていました。

先ほどの羽藤さんのミニレクチャーの最後のところできっちり、個人社会とコミュニティの話に結び付けて貰えたので、気持ちが楽になりました。

ご紹介いただいた通り、studio-L という事務所を大阪でやっています。studio-L では、コミュニティデザインを主な仕事にしています。今日はコミュニティデザインという言葉で今関わっている、あるいはこれまで関わってきたいくつかのデザインについてお話します。

簡単に自己紹介します。先ほどご紹介いただいた通り、もともとはランドスケープデザインと言って、緑でどんな空間を作っていくか考えたり、建築の設計等をやっていました。ただ、空間を作るだけでは、5年 10年経つ間に誰も使わない公園になり、何かもったいないな、と感じていました。

そこで市民参加型で楽しい空間にしていくためには、ハードの形を変えなくても出来るのではないかと思い、市民参加型のパークマネジメントに10年ほど取り組んでいます。

公園の周辺に住んでいらっしゃる方やNPO・サークル団体の方々に公園に来ていただいて、「ここで一番やりたい」と思っているプログラムをしてもらって、そんな仕組みづくりをやると来園者数が伸びたりします。あるいは数だけではなく、より深く関わる人たちが増えてくる。このようにして、個人社会の中でいろんな人たちが繋がりを持ち始める、ということを目の当たりにして「なにかできるかもしれない」と可能性を感じた次第です。

そんなことを何回かやっていると、公園の中だけではなくて、いろんな人たちが活動を始めて面白い状況が生まれるんだったら、それ街全体でやってみたらどうと誘ってくれる方がいました。そこで「まちづくり」という仕事をするようになりました。

だからまちづくりについては、あまり詳しくない。素人ですがデザイナーとして出来る事をちょっとお手伝いできたらいいなあと思っています。

普段からこうやって皆さんとお話するのが僕の仕事ですが、まちづくりの現場に何年かいると1000人か2000人の方と仲良くなってきましたので、仲良くなった1000人、2000人の方と総合計画というものを一緒に作ってみてはどうかとお誘いをいただきました。「僕等は素人ですからシンクタンクの方々のように出来ませんよ」とお話して、市民の方々と総合計画というものを作ることにしました。

コミュニティーベースと書いてありますが、常にテーマ型であり支援型であり共益型であり、そこにいらっちゃって活動されている方々と一緒にデザインや計画を考えたりするのが基本的なスタンスです。

その他に教育、研究もしています。研究は中山間離島地域の研究というのを兵庫県の職員として5年間くらいやっていました。あとは大学で参加型のまちづくりをしたり、先ほどご紹介いただいた大学で教育を始めました。

今日お話ししたいのは3つか4つのプロジェクトです。1つ目は先ほどのパークマネジメントに取り組むきっかけとなったプロジェクトです。

10年前に兵庫県の県立有馬富士公園のパークマネジメントというものに携わりました。40へ

クータルくらいの公園で、その公園の中でいろんな人がたくさん来て楽しい時間が過ごせるような運営計画を作って欲しいというのが依頼でした。そこで、東京ディズニーランドと普通の公園がどう違うんだろうなあというようなことを最初に考えました。

ディズニーランドというのはご存知の通り、ミッキーとかドナルドとか音楽を演奏する歌って踊ってくれるキャストがいて、この人たちが僕等を夢の世界に連れていってくれるんじゃないかなあと思いました。

ところが一般の公園は、「ようこそ」と迎え入れてくれる人がいない。有馬富士公園は「ようこそ」と迎え入れてくれる人を作るべきではないかという話をしましたが、オリエンタルランドという会社のキャストの方々は給料を貰っています。一方で県立の公園は、キャスト、歌って踊る人たちに給料を支払うわけにはいかないのです、ゲストとキャストは両方とも公園の利用者だと考えてみましょうという提案をしました。

要するにお金も貰わないのに歌って踊ってくれる人たちを探さなきゃいけないということです。そんな都合のいい人はいるのか、ということで、公園の回りをいろいろ調べてみました。公園の回りには、NPO、サークル、クラブ活動、いろいろやっている方がいます。

こういう活動団体の方々をひとつずつヒアリングに行って、どんなことやっているのか、何かいま困っていることはありませんか、どこをクリアすればうちの公園で活動してくれますかっていう話を聞きに行きました。

最後には、あなたが今注目している他に面白い活動をしている人を3人紹介してもらい、数珠つなぎでどんどんどんどん100ぐらいの団体の人の話を聞いていきました。

その後、電話をかけて「皆さんの言っていた会議室、あれは無料になりました」とか、「あのポスターとチラシはもうローソンでコピーしなくてもいいです、公園の方がそれ全部やることになりました」とお話しして、そのかわりに公園に来て、来園者に対する公園のサービスを提供して貰うということにしました。

条件は1つ。あなたたちがあなたたちだけで楽しむようなサークルみたいな活動ではなく、来園する方々にそのサービスを提供して欲しい。サービスを提供する人たちは、やらされているという感覚はありません。

例えば、竹ひごと和紙で凧を作って飛ばす平均年齢72、3歳のおじいちゃんの6人組がいます。この人たちは子どもたちと一緒に凧を作って、三連凧とか足が長いやつとかを飛ばして楽しんでくれます。若い人たちと接して、楽しかったって帰っていくんですね。

天体望遠鏡のマニアもいます。数百万円くらいの望遠鏡を持っていてそれとなく誰かに自慢したかった人です。どうや！っていうふうには言いたくないんですけども、なんとなく「すごい！」って言ってもらいたい人がこうやって望遠鏡を持ってきて、日本で何台しかないんだって話をしながら子どもたちはそれを覗いて、向こうの遠くの風景が目の前に来るので、「すげえ」ってびっくりしていると、「せやろ」ってとても満足気です。「今日も楽しかった、また来週も来るわ」って毎週この週末にこの人たちは活動していきます。

オープンスペース、公園ってシステムがないと何となくそこで遊んで弁当を食べて帰るみたいなことになるかもしれませんが、何かそこに仕組みがあるとお互いが楽しく「win-win」の関係を作って帰ってくれることになるということにこの時初めて気づきました。

公園のパークセンターに行くと、今日ほどここの団体が何時から何をやっています、っていうのが案内があります。来園者は、これと、これと、これを体験して帰りますとかですね、そうやって選りながら楽しんで帰ることができます。

もちろん興味のない人は、そういうのに参加しないっていうのもあるかもしれませんが、そういうことをやっていると、オープンした時は40万人くらいですが、今は大体75万人くらいの

年間来園者数があります。山の中にある 40 ヘクタールの公園で来園者が徐々に増えていく理由は、公園での団体数が増えていること、団体が1か月に1回しか出来なかった団体が慣れてきて月2回できるようになっていたり4回できるようになってくると、その人たちが1団体あたり200人とか300人くらいのファンを持っていますので、その人たちを毎回公園に呼び寄せてくれるところにあります。

この関係性、人間と人間の間をどういう風に作っていくかっていうのがとっても大事なんじゃないかなあと思いました。

これを引用したのがデパートの再生計画ですね。鹿児島 65 万人の都市の中心部にあった三越という 10 階建てのデパートが撤退することになり、このあとの商業施設にも同じように、コミュニティの力を入れたらどうかかなあとというふうに思いました。この 10 層のデパートの中にテナントに貸さない床、これを作って欲しいというふうに提案しました。

単に床を作ってそこにおじいちゃんおばあちゃんが並んで座っているという状態ではなくて、さっき言った通り、周りのコミュニティの人たちがいろんな階でいろんなことをやる、このコミュニティがそれぞれファンを持っているのでファンの人たちをデパートに連れてくるっていうことになって、その人たちが買い物をして帰るといった関係性を作らなきゃいけないんじゃないかなあと考えました。

商品やサービスによる魅力をたくさん提供して、一般のお客様をお得意様にしようという時代は少しもう変わりつつあります。もうデパートになんか行かないよっていう人の方が圧倒的に多いので、この人たちはもっと違う気持ちで動かなきゃいけない。

将棋の話、鉄道の話、乳がんの話、不登校の児童の話、それぞれ個別のテーマで活動する人たちに対しては興味を持つので、この人たちの活動と商品、サービスの魅力というのを一致させていかないとこれからデパートって上手いかなと感じています。

じゃあ、マルヤガーデンズの周りに歌って踊ってくれる人、お金も貰わないのに、むしろお金を払ってでも歌って踊りたい人っているの？っていうことで、また同じようにヒアリングをやりました。朝、昼、夕方、晩、遅晩くらいですね、予約してずーっとヒアリング回りをしました。

その後、この人たちに集まってもらってワークショップをやり、自分たちで活動のルールを決めて貰い、「一体いくら払うか？」という床代も自分たちで決めて社長に提案して貰いました。

結果、地元のアーティストだとか写真展をやる人がいたり、アウトドア団体が自然環境のレクチャーやっているところです。

ここにラコステって書いてありますけども、いろんなお店が入っているテナントに貸してもいい床をコミュニティの人たちに日替わりに使うということをやっています。

地産地消の料理教室やる人がいたりとか、不登校の児童が育てた野菜を売るような場所があったりもします。

そんなところをやって、今ちょうど1年ちょっとですね。1年半くらいで、もともとの予測していた数字よりはいい経営状態になっているようで、ホッとしています。

最後に、延岡、宮崎県の延岡駅周辺でやっていることについてお話しします。

ここで考えたこともほとんど同じです。有馬富士公園の 40 ヘクタールのところで出来たなら、それは何もここにため池がなくてもいいんじゃないか、ここ山じゃなくてもいいんじゃない、公園じゃなくてもできるんじゃない、という考え方です。

もしここにバシッと道路が通っていて、そこに中心市街地があつて空き店舗があつたりしてもいいんじゃないかと思いました。同じ枠を当てはめてみれば延岡駅の周りも、まだいろいろ活動できる場所があつて、有馬富士公園って山奥で出来た話なんだから、駅前が出来ない話じゃないだろうと考えました。

幸いなことに商店街には活動できる空間がたくさん育ってしまっていて、ここ貸してもらっただけで

かなり魅力的なことが出来る。駅前広場、駅はちょっとこれから改修しますが、例えば駅の中で何が出来るか、駅前広場で何が出来るか、近くの神社で何が出来るか、空き店舗で何が出来るか、あるいは3つくらいのコミュニティが一緒になって何か出来るところはないか、というようなことをコーディネートしていく、こういうことがこれから延岡で進めていこうと思っていることです。

いつものごとくいろいろ誘いまして、最初は60団体からスタートして話をしています。今135団体まで増えて、もう会場に入りきらないということになり、ちょっと隣のテーブルの音がうるさくて聞こえない、みたいなことになって、次からはちょっと違う場所でやっていこうかなあというふうに思っています。

まとめます。これまで公共空間は、戦前はある種の公共空間があるとその周りに地縁型のコミュニティがいろいろとありました。そこに空間があるだけで入れ替わり立ち替わり祭りやったり縁日やったり、いろいろ使ってくれたんだろうと思います。

あるいはそこで何か立ちあえば挨拶が生じたりしたと思いますが、戦後急速にある種の塊がバラバラになっていっちゃって、それにも関わらず公共空間を設計する人は、この公共空間のデザインが悪いから人が集まらないとか、ここで祭りが行われないうふうなふうに考えて、少し階段状で皆が座れるところ、真ん中にイベントが出来る場所とかいろいろ考えてきましたが、現状として見えないところでは何かこう違う状況が生まれちゃってるんで、場のデザインだけの責任ではないという気がしています。

一方で地縁型のコミュニティがバラバラになったままかという、テーマ型で集まってくるコミュニティは急速に数も種類が増えています。この人たちの問題としては、このコミュニティが公共空間にあんまり結びついてなかった。どこかの公民館借りてやっていたり、どこか遠いところでそれぞれバラバラに活動していた。何かここを繋いでいって、みんなで活動する仕組みがあるんじゃないかと考えました。自然に活動を続けるとバラバラになっていくだけなので、この仕組みを何とか成立させる外側からの応援団が要るんじゃないかな、というのが今、よく考えることです。

行政は一体何をするのか、土地の所有者は何をするのか、コーディネートする人は一体何が出来るのか、それぞれお互いに「win-win」になれるような関係性を作っていくながら、新しい公共の担い手って言ったらかちょっと言いすぎかもしれませんが、楽しいこと何かやりたいと思う人たちが地縁型あるいはテーマ型、いろんな人が入り混じって公共空間を楽しくしていく。そういうことが出来れば、まちのいたるところでまたいろんな活動が出てくるかもしれない、それをハシゴしながら楽しむっていうまちの楽しみ方が出来るような気がしています。

横浜のまち、確かに美しいですし、これからも美しくなりそうだと思います。その美しくなった空間の中がですね、実は見えないところで人と人のつながりがバラバラになっているとすれば、使いこなす主体や仕組みがそこに存在していないのかもしれないかもしれません。

それを同時に作っていくことが、よく言われる「ソフトとハードを同時に作る」ということだと思います。羽藤さんの問題提起に答えるのであれば、大きな災害が起きた時に普段使っている空間の災害時の使いこなす方、あるいは普段から一緒にいる人たちが、今日は来ていないと「あの人大丈夫やろか」と、横浜だから大阪弁じゃないですね、「あの人大丈夫なのかな」と思うこと、そういうその気持ちが大変なんじゃないかなという気がしております。

早口ですが、僕からの話題提供は以上になりたいと思います。どうもありがとうございました。

○司会

山崎さん、ありがとうございました。

3人のレクチャー、いかがだったでしょうか。

【ランドテーブルディスカッション】

スピーカー 佐藤 滋／早稲田大学教授
西村 幸夫／東京大学教授
鈴木 伸治／横浜市立大学准教授
羽藤 英二／東京大学准教授
山崎 亮／studio-L 代表、京都造形芸術大学教授
大学まちづくりコンソーシアム横浜委員
横浜国立大学／北山 恒・野原 卓
神奈川大学／曾我部 昌史
関東学院大学／中津 秀之
特定非営利活動法人 横浜プランナーズネットワーク
山路 清貴／理事長、菅 孝能

ファシリテーター 国吉 直行／横浜市立大学特別契約教授

○司会

ここで次のランドテーブルディスカッションに移りたいと思います。

本日の主題であります、これからの都市デザインが目指す方向について議論を始めたいと思います。

発言する人は名前を言ってから発言をするようにして下さい。

皆さんのお手元に、スピーカーの皆さんがどういう配置ですわってらっしゃるか分かる資料がありますので、参考にご覧になって下さい。

ここからは国吉さんに進行をお願いしたいと思います。国吉さんお願いします。

○国吉

3人から刺激的なレポートを、ありがとうございました。

では、これからランドテーブルディスカッションしたいと思います。事務局から佐藤先生と西村先生に、一言話してもらってくださいということです。とりあえず、これからのについて。

○佐藤

今朝、3.11以降の建築都市という原稿を書き上げて、羽藤さんもおっしゃったけど、やっぱり迷うんです。高台移転は誤りだってね。それから無常観と港の風景とか、そういう議論がずっと出てきてるわけですよ。そういうものが突きつけられたわけです。これは近代の歴史の中で無かったなあという感じで、我々何だったのかと、皆思っているわけです。これから先は分かりませんが、1年ぐらい経つと皆忘れてしまうかもしれない。

そういうふうに見た時、鈴木さんが先ほど説明してくれた（海都構想）は、3.11以降だったらやっぱり違っているのか、全然違わないのか。見せて頂いたものの感想です。

○西村

羽藤さん、山崎さんがおっしゃっていた **private** とか **common**、**community** はこれから大きなものになっていくとすると、じゃあ今都市デザイン室でやってるようなハードはどうか。

つまりハードの時代じゃなくて、ハードはある程度揃ったので、あとはどういうふうにして上手く人が関わっていくのかということになるとすると、都市デザイン室がやっていることを大きく変えないといけないということになりますよね。

ただまあ、ハードはハードで、ハードがやっぱりそういうものを誘発するところもあるんじゃないかなあともまだ思ってるんです。古い考え方もかもしれないけど。

そういう意味で今後、都市デザイン室が本当にハード、ソフトの中でどんな方向を向いて行ったらいいかっていうことに関して、すごく大きな問題提起をされたと思います。

○国吉

どうもありがとうございます。

それでは、横浜の中で、郊外部の活動とかでも頑張ってる、市民に近いところで頑張っておられたと思いますけども、横浜プランナーズネットワークの山路さんどうぞ。

○山路

組織名が長いので略して横プラと言って下さい。山路でございます。

先ほどの国吉さんの定義の中で、都市の骨格を作る、それを戦略的に考えるような大きな都市づくりデザインと、地域の中に入っていき、これは小さな都市デザインと言って良いか分かりませんが、二つの方向で都市デザインをやってきたというお話がありましたが、私は後者です。どんどん地域の中に放り出されて。そのまま地域の中に居ついてしまった人間なので、大きな都市デザインという話ではできません。今日は地域側の戦力だと思っていただければ。

今までの議論を伺った中で、二つほど気になったことがあります、時間も限られますので一つだけ先に申し上げます。

西村先生は都市デザインに権力があるとおっしゃいましたけれど、私にはちょっと疑問です。都市デザイン室とは 33 年ほどつき合っていますけれど、行政内の権力によって都市デザインが遂行されたという思いは私にはないですね。

むしろ都市デザイン室に対する、代替の利かない必要性とか信頼性のようなものがどこかにあって、都市デザイン室が居ないと困る。居ると話が面倒臭くなったりするんだけど、デザイン室抜きでできたものの方がいいかっていうとそうでもない。デザイン室に何らかの主導性みたいなものを期待する意識が横浜市行政の中にはあったっていう気がします。

そのために、市長は5人も代わっても都市デザイン室はあり続ける。国吉さんはずっとそこに席があり続ける。都市デザイン室の権力が国吉さんをずっと居させた訳ではないだろうって思っているんです。

それではデザイン室の必要性、デザイン室への信頼性って何だろうかと考えると、縦割りである行政組織に対して、横串を刺してきた存在であることです。行政的でない訳ですけども、そうあることで行政全体が活性化するという意味が非常に重要だろうと思っています。横串の刺し方っていうのは色々ありますけれど。

ところが、信頼感が増すとともに仕事はどんどん定型化していきます。例えば、景観行政を定型化したコントロール手法だけでやっていくようなことをすると、それはまさに縦割りの仕組みに組み込まれるということで、自分がやっていることに横串を刺しづらくなってきます。西村先生は、横浜市にはそういうことがあまりないから良かったと仰いましたが、楯突くわけではないですけど、都市デザイン室にもそうした定型化した業務が増えている気がします。例えば、景観法にまつわる色々な業務がありますし、歴史的建造物の認定業務、屋外広告物のコントロールもそうです。都市デザイン室は、私が初めておつき合いした頃に比べれば3~4倍の人的勢力になっていると思いますけども、かなりの多くの勢力が縦割り化の中で仕事をしています。

もう一度、デザイン室としての横串の刺し方っていうのを考えなくちゃいけない。その時に、このことは後で時間があれば申し上げますけれど、小さなまちづくりというか、都心周辺部や郊外部での地域づくりに対して、デザイン室がどういうちょっかいを出してくれるのか、どういう横串の刺し方ができるのか考えるべきだと思います。

○国吉

どうもありがとうございました。

さっきのお三方のお話、あとの二人の話の中から、地縁社会とかですね、空間よりもっと大事なことが起こっているんじゃないかというようなこと、カタチをつくる人間の役割というのはどういうことだ、ということがあります。北山先生、いかがでしょう。

○北山

大学コンソーシアムの北山です。

モビリティを専門とされている羽藤さんのプレゼンテーションをうかがいました。モビリティというのは、本来一番 20 世紀的な都市構造の根幹の概念。人をいかにスムーズに移動させるかっていうのが都市の 20 世紀のアイデアだったと思います。経済を中心にした、経済活動をいかに上手く支えるか、そういう都市構造をつくる。つまり経済活動を支えるインフラ作りが 20 世紀の都市を形作ったんだと思います。3.11 を経験して、21 世紀の都市の主題は経済活動を支えるインフラではないという直観的なイメージを受けます。

3.11 以前に、資本主義経済自体がクラッシュしていて（世界構図が動き始めている）。羽藤さんが示された 4 つの事象ですが、20 世紀は **public**、**private** の（二項対立の）概念で世界を描いていたのが、**market** と **common** という（それをオーバーレイする）概念が提出されました。山崎さんの話されたのが **common** の概念だと思うんですが、このような新しい社会認識の中で都市を構想していかななくてはならない、そういう状態ですね。

カタチ自体が、どういう意味があるのかっていう時に、実は都市デザイン室というのは、プロセスが大事だったにも関わらず、最終的には評価は形でしか見えないんじゃないかと西村先生がおっしゃってました。やはり形というものは最後にわかる。

都市というのは人がたくさん集まり、無意識に都市空間を体験するところです。その都市をすばらしいと伝えるものはカタチ、目に見える都市空間が人々にその意味を伝達するのだと思うんです。

そのカタチに関して、鈴木さんが紹介されてました「海都横浜構想 2059」のムービー見てて思ったんです。僕はコンソーシアムのメンバーで建築家なんですけども、あのムービーの建築には一切関係させて貰ってないんです。あのアイデアは未来的ですがカタチは 20 世紀的かな。

瑞穂ふ頭は、北沢さんの最初のアイデアでは森のように木々に埋まっていた。50 ヘクタールあるので 50 の国にマネジメントさせて、横浜市が一切お金を出さずにそこを緑地化しよう、開発しようというアイデアでした。

1 ヘクタールずつ区画して 50 の国にパビリオンを建ててもらおう、しかし恐らく建ぺい率を 2%とか 1%ぐらいしかあげない、（ヴェネチア・ビエンナーレの会場になっているジャルディーニのような、）公園のなかにある国際パビリオン群というアイデアだったと思います。

それが、ムービーのなかでは、カタチをもった建築に埋め尽くされて 20 世紀的未来都市になっています。特に、大黒埠頭のカーテンウォールでラッピングした高層のタワー、あんなものを未来ビジョンとして出していいのかな。もっと港の海風の気持ちいいところ、外部空間が大量にあるような気持ちのいいテラスがいっぱいあるような、そんな建築にすべきだと思うんです。こんなこと言っているのかな（笑）。

「海都横浜構想 2059」の中で僕が一番北沢さんに主張したのは、既存の都市のネットワークと新しい水上交通や新しいネットワークを繋ぐ、ちょうど海に向かう軸線のようなもの。そういうものを作って、そこが風の道になり、人々の公共の空間になるというものでした。

バルセロナに、ランブラスという海に向かうちょうど河川のあとで遊歩道になっている場所がありますけども、そういうものを横浜ではイメージをして海風の道、そして公共公園のような道を作る必要があるんじゃないかと提案していきまして、それは採用されています。

カタチではなくて、その辺りの環境。人の移動のスムーズさじゃなくて、そこに居る意味を作るような空間、都市にはそれが大事だと私は思っています。

○国吉

都市デザイン室も私のプレゼンが悪かったのか、カタチしか見せてないっていう感じがあって、プロセスはなかなか見せるのは難しい。地域との合意っていうか、創造性みたいなものをどういうふうに共有していくかっていうものをベースにして、最終的に形にもなったというくらいの感じだと思うんです。

そういう意味では山崎さんのような、そこにズバッと最初から取り組んでっていうのは新しい活動かなと驚いたわけです。

その辺、長年やってこられた立場で菅さんいかがでしょうか。刺激を受けましたでしょう。今後について。

○菅

横プラの菅です。

羽藤さんの話、あるいは山崎さんの話、興味深く聞きました。横浜でも前々から地縁型コミュニティとテーマ型コミュニティというのは大きな話題になっていて、やっぱりテーマ型コミュニティの力というのは大変大きいというのが横プラの中でも、常々話題になっていたところなんです。

ただ一方で、例えば私がずっと関わっている山手のような地域のコミュニティ、地縁的なコミュニティというのはやっぱりもう一回、その力を評価していかなきゃいけない。それは 3.11 なんかの被災地の状況なんかを見てもそう思います。

行政だけが都市経営とか地域経営のプロである時代っていうのは終わったんじゃないかなっていう感じを持っています。

住民も、何がしか地域の経営をする専門家としての能力っていうのは持っている。それをどうやってこれから引き出していかかっていうのが僕等のような専門家や行政のこれからの仕事だろうという感じがします。

そういう意味で、先ほど都市デザインは建築と違っていわゆる人格を持たないんじゃないかっていう話もありましたけども、僕は都市デザインあるいは都市デザインをやる人間っていうのは、ある意味黒子だろうと思うんです。縁の下の力持ちでいいんだと。別に表舞台に出る必要はないという感じがしていて、そういうことをもう一回再確認するっていうことも大切なのかなという感じがしています。

それから先ほどの、北山さんの話ですけども、私もインナーハーバーっていうのは非常に注目しています。

横浜のアイデンティティの一番の大きなところは、このインナーハーバーだろうと思います。ただ、ここの価値は、今までは、言わば産業空間と言いますか、そういうことでずっと来ていた。非常に人工的な環境を高度に作り上げてきた。一つ評価すべきだろうと思うんですけども、これからはそれだけではなくて、もっと多角的な価値をインナーハーバーに持ち込まなきゃいけない。

それは一つは交通であるだろうし、もう一つはやっぱり自然とか緑だというふうに思います。

人間の暮らす環境にとって大切なのはそこだろうと。それをシンボリックに表現する都市デザインはあるのだろうか。

日本のランドスケープの手法で回遊式庭園というのがありますがね、これは大名の庭園なんかで、真ん中に大きな池をもって、その回りを巡り歩きながらその風景の変化を楽しむということで、私は、この考え方を横浜のインナーハーバーに適用できないかなあと思っています。

そうすると瑞穂ふ頭は先ほど北山さんの話にもありましたように、回遊式庭園の池の中の小島なんで、これを全く緑の空間にすることによって横浜の港の一つの大きな個性っていうのが生まれてくる。それを明治神宮の外苑みたいに日本全国から樹木を提供していただいて森を作っていく。場合によっては世界からっていうふうなかたちで約 50 年かけて緑の島を作る。私は面白いプロジェクトになるんじゃないかなと個人的には思っているんです。

○国吉

インナーハーバー、ランドスケープということが出ました。

ずっとこのプロジェクトに関わってきて、広い意味でランドスケープをやってらっしゃる、中津さん、横浜でこれから何をチャレンジしようと言われてるか、お話いただければ。横浜市都市デザイン室に対する批判でもいいんですけど。

○中津

ランドスケープデザインをやっている中津と言います。コンソーシアムに私混ぜてもらったのは、多分ランドスケープデザインということで入ってると思ってるんです。

建築系の方から見ると、ランドスケープデザインは植木を植えてくれる人だろうというような立場で、多分、緑に関して話をしなければならぬと十字架を背負ってはいるんです。個人的には子どもの遊び場をずっと設計してきた関係で、どういうふうに人間の繋がりを作るかっていうことも山崎さんの話になってしまうわけです。

私の中では、ランドスケープの要素の中で建物、今皆さんがハードという引出しにポンといれてしまってますけど、そういうものと、人間の繋がりはどうあるべきかっていう視点でずっと街をどう描いていくかっていうことをやっています。

ちょっと関西弁になってしまうのは港町神戸から来てますので、神戸人としての横浜の比較文化論というのも非常に個人的には興味のあることです。例えば神戸であれば六甲山という一つのシンボルがあって、このお父さんに見守られて子どもたちは日々暮らすかのように常に毎日六甲山を見て暮らしてるわけです。横浜の場合は構造的にそういうものがございませんので、菅さんの言われたような回遊式庭園的な、いろんな拠点を巡りながら街の中で人が暮らしていくっていうことが大きなことかなあと思ってるのは事実です。

私たち金沢区っていうちょっと外れたところに居ます。先ほど 6 大事業の中でもご紹介ありましたけど、金沢区の大きな埋立地があって、並木というところですよ。榎文彦さんを初め多くの著名な建築家の作られた都市のデザインです。建築の単体としても文化的価値ございますし、プランニングとしても都市のデザインとしても非常に考えられた当時先進の街だった。

今、予測通り過疎化が進んでる。その中でどういうふうに人と人を繋ぐべきかっていう活動を、大学として、商店建築とかやってらっしゃる経済の先生とか、高齢者福祉やってらっしゃる文学部の先生とか、それと子どもの遊びやってる私とかですね、連携を取りながら新しい街の人の繋がりを作ろうということを経済と一緒になってやっています。

始めたばかりなんですけど、街をずっと見ていくとかなり緑がいっぱいある。いろんな商店も部分的に残ってて、年寄りの方々がいて、そういう方々の人生の話を聞いたり、その聞いた話

を、さっきの山崎さんの話と繋がると思いますが、オーラルヒストリーというカタチで小学生に公開する。そうしながら高齢者と子どもたちを繋ぎながら何となく地域を、社会を変えていこうと。ただ繋げるだけじゃなくて、いろいろ数値目標を持ちたいね、と夢のような話ではあるわけですけど。

何かそういう地域の高齢者の方と子どもを繋げることによって、ちょっと若いお母さんが仕事に行きやすくなるとか、お母さんにお金を投資するんじゃなくて地域の人の繋がりによって、お母さんが働きやすい環境を作る。それによって、子どもは一人でやめておこうと思った人が二人産む、三人産むというような、そういう地域社会をつくることによって地域の出生率が上がる。

全体として縮退していくことは分かっていますけど、縮退するからどうやって逃げ切ろうっていうことじゃなくて。縮退するにしても、どんな縮退の仕方があるか、そういうことを考えながらランドスケープの緑地を作ったり、建築のあり方を考えようかなっていうことをしています。

○国吉

曾我部さんは BankART のスタートの頃から、さり気なく連携を取りながらいろんな細かい工夫とかやられています。今は黄金町だけじゃなくて寿町の方にもチャレンジされてる。建築家としても有名なんですけども、建築にこだわらず何か狙ってるなっていう感じがします。

活動のエネルギーの源は何なのかっていう、その辺をお話いただければと思うんですけど。

○曾我部

曾我部です。

先ほどの映像について、北山先生「なんかひどい建築、20 世紀のひどい建築が」、っておっしゃってました。参加メンバーを見ると建築家は僕くらいなので、会場の空気として「あいつが設計した」って思ってるんじゃないかと（笑）大変不安な落ち着かない感じがありますが、僕が設計した訳でもありませんので。

私の建築家としての背景と、今日の第一部の話の感想を、少し関連付けて話せるかなと思います。

第一部での、横浜の都市デザイン史をうかがって、いろいろ考えるべき問題もあるのかもしれませんが、総じて密度のある、大雑把に言うと楽しそうな時代であったなあというふうな感想を持ちました。様々な試みを実現しているということもありますし、事例の豊富さを見てもそう思うわけです。一方で、この先について、果たしてこのままでいいのかというと、そうでもないように思います。我々はもうしばらくこのエリアで活動していかなくてはならないので、そこをもう一回考えなくちゃいけないなと思ってるんです。

今日のポジションは大学まちづくりコンソーシアムのメンバーとしてなんですけども、ちょっとスイッチしまして、横浜の街で活動している立場でお話したいと思います。

設計事務所も、私の家も、大学も実家も、多分ここから 10 キロ圏内くらいに入ってます。なので僕は、この街がちゃんとしてないと困るわけです。困るという意味で先ほどの 40 年の横浜のまちづくりを振り返って考えてみると、大変素晴らしいんですが、素晴らしすぎるんです。

どういうことかって言うと、技術として先鋭化し過ぎてるのではないか、まちづくりが。コミュニケーションとかコミュニティとか言いながらも、そのことすらもすでに技術として語られている感じがいたしました。

人とのコミュニケーションはあっても、技術となった瞬間に、何て言うのか、愛が見えにくいんです。技術と愛は別に対立関係にはないはずなんですけども、技術があまりにも先鋭化し過ぎていて、関わっている方が優秀すぎるっていう問題もあると思うんですけども、どんどんレベ

ルが上がっていってしまう。そうすると、人とか地域とかに対する愛が見えにくくなるなあという感じがしています。

今日は、残された時間を 18 人で割ると 5 分ですので、5 分以上喋っちゃいけないことになるんです。少し大雑把な提案をさせていただくと、これは北沢さんが言われてたことを引き継ぐということにもなりますが、UDCY（横浜アーバンデザイン研究機構）を立ち上げた方がいいのではないかと。市の外に、BankART が上手くいっているのも市の外で実験的な試みをやれる土壌がある、土俵があるということだと思っんです。

UDCY のようなものを何とか立ち上げて、予算の問題とかいろいろあるとは思いますがでも大都市ですからそのくらいの予算は何とかして立ち上げていただいて、そこでもう少し実験的な試みをする。

技術論というか、技術としてのレベルを上げるではなくて、いろんなことをやってみる、みたいな、そういうふうになることで地域との関係、愛に満ちた地域との関係を我々は育むことが可能になるんじゃないかなあと思っんです。

大学まちづくりコンソーシアムの会議では、僕は毎回、都市デザイン以外の人間がこの議論には参画すべきだというふうに言ってるんです。時には社会学の人が入った方がいいって言ったり、あるいは都市経営とか経済の人が入った方がいいって言ったりするんです。都市デザイン室的な組織だとどうしても難しいかもしれませんが、UDCY のようなものが仮に出来て実験的な試みができるようになったら、そういう人を入れてみてもいい、というようなやり方も可能だと思っんです。

そういう意味でもう少し自由にするためには、非常に複雑に技術が構築された横浜であるからこそ、そういう少し大らかな組織で、愛に満ちたまちづくりに向かう。そういう実践を僕は寿町とかでやれるといいなあと思って実験をしているということです。

○国吉

どうもありがとうございました。技術的に先鋭化してちょっとまずい、ということがあるのかな、と反省しております。そういう意味で長年行政として培ってきたものを一旦はずして、外に預けてみるのも大事なのかな、というふうに感じております。

若手の野原さん、いかがでしょうか。

○野原

横浜国立大学の野原と申します。

私は横浜新人で 2 年目、横浜に来てから 2 年目にして、先ほどの菅さんや曾我部さんのお話に近いんです。まちづくりそのものの成熟度が非常に高くて、市民の方がよっぽど専門家で、私のような新人が入っても、何この若造はということで、ほとんど相手にされないくらい皆さんが成熟し切った中で進んでいってる。それはそれで（世代交代などの課題があるとは思いますが、しかしながら、地域主体でまちづくりができるという意味で、）そこはある意味心配してないんです。

一方で、市民の場所であるべきはずなのに、市民の踏み込めない領域っていうのがたくさんあって、先ほどのインナーハーバー（臨海部）の問題とかですね、それは非常に重要なテーマなのではないかというふうに思っています。

北沢先生といろいろ議論した中で、先生どんな計画とするか考えていた時にですね、一つはリング構造の議論が出ました。リングの構造っていうのは実は 1992 年の第 1 回都市デザインフォーラムの時点ですでにアーバンリング展というのが行われて、プリミティブなアイデアは既にそ

の時出ていたんです。

私、その頃まだ高校生くらいなので、当時の都市デザインフォーラムのことを知らなくて、どちらかというと、私にとっては新鮮なものであったので、いいんじゃないですかと背中を押したこともありまして、このようなリング案となってゆきました。

その時に考えていたことの一つにシティ・アイデンティティがあります。例えば、お隣の川崎市は、工業都市としてのあり方が明確で、先端ものづくり拠点の形成と集約を一所懸命やっていたりだとか、低未利用となった工業跡地を再生するにはどうしたらいいか考えていたりとか、あるいは産業観光を一所懸命やっていたりとか、ある意味、一つのアイデンティティに向かって走っていけばいい。目標がはっきりしている。

これに比べると、横浜は逆に言うと、何と言いますか、いろんなものを豊富に持ち過ぎていて、産業もあるけども産業に特化して進めるわけではないし、農業も実は、いろいろなところで盛んに行われていたり、機能集約された都心部もあったり、そういうのがいっぱいあるんだけども、それぞれが連携していない。

そういった中でまちなかを考えていく時に、ちょっと若干暴力的ではあるのですが、リングで囲っていくと、例えば、今まで、都市計画が若干外側に置いてきた、産業であったり流通であったりというものが配されていて、これらも都心の力を上手く連携して使うことが出来れば、また違った展開が見えるんじゃないかということを考えて、リング型というのを一つ問題提起として考えたものです。

今まで、都市計画は産業とかそういったものをどちらかと言えば忌み嫌われるものというか、離れたところにちょっと置いて、両方お互いがそれぞれ上手くいってればいやってことだったと思うんです。今回、3.11 という出来事のことを考えても分かる通り、やはり、人々が生きていくためには、工業であったり、エネルギー、流通であったりっていうもの存在があって初めて成り立っている中で、それが生活の中から外にってしまうっていうのも問題ですし、近年では、産業そのものの自体がもう衰退しつつある中で、どういった新たな力が育めるかということを考えていくための問題提起の一つのが、あの提案だったというふうに解釈してます。

都市デザインというのは、都市計画を改革する手法であり、都市計画というものに新しいものをなにか掛け合わせることで、次の都市のあり方というのを探っていく一つの手法論ではないかというように鈴木先生もおっしゃられていたのを伺ったことがあります。私も本当になるほどと思って、やっぱり次は産業であるとか流通といった、根源的には人間に関わるものであり、逆に言うと、横浜のポテンシャルであり可能性であるものを掛け算していくことによって、どういったことが出来るかというのは、意外と都市デザインの役割として重要ではないか、今までの手法では、産業空間など上手な整理が出来なかったところに対して、都市デザインの力を使って、どういった、今までとは違う、新しい力とマッチングできるか。チャレンジングな実験場が正にここに、インナーハーバーの中に眠っているんじゃないかというふうに思ってます。

それぞれの小さな都市デザインをやっていく一方で、こうしたことをやっていく役割も、非常に重要なテーマであるし、中長期的ではありますけど、チャレンジングな試みとして可能性があるんじゃないかというふうに思います。

○国吉

愛の問題も含めてですね、あまりデザインを先鋭化しすぎない方がいい場合があるということも、それは感じております。

都心なんかで都市デザイン室が関わると全部きれいになって嫌だねって、雑然とした部分も都市には必要なんだと。それをどうやって市民の方と共有しながら維持するかっていうことも難しいなっていう感じになって、全体的に健康志向になっていく。きれいになっていくのが好まれる。

都市の猥雑さみたいなものも含めて維持して進むとか、そういうのをどうやっていけばいいの

かつてというのは非常に難しいことではありますが、いろんな要素がどんどん重なってきて、どうやって要素を出し合う人間が集まるのか。そういうことが重要になってくるかなあと感じております。

そういう意味で UDSY みたいなものを作るべきだっていうことも話に出たんですが、そういうところにも関わってありましたし、環境問題というようなことで、横浜市の信時さん来られていますので、それにこだわらず多少広い意味の都市デザインという視点からご意見いただければと思います。

○信時

私が今ここの立場でここにいるということは多分、環境問題、温暖化対策問題での話を期待されているんだなと思いました。低炭素都市構造は何なのかということなんです。

今、原発反対がどうだとか言われてます。今ほどエネルギー、温暖化問題を市民の方が考えている時代はないのではないかと思います。

しかし、新聞紙上、テレビで全く忘れられているのは、実は来年の 2012 年が京都議定書の最終目標年度で、その時（温室効果ガスの排出を）6%削減できるかどうか、ということです。これは 3.11 の前は多分 OK と言われていたのですが、無理ではないかと思います。その時にどんなペナルティを国外に払わなければいけないのかということなどはだれも議論していません。

これまでは電力会社に任せれば良かったということでしたが、もう任せられない、となると誰が払うのかということが相当問題になると思います。2年前に政権が変わった時に当時の首相が、2020年25%、2050年80%削減するという国際公約をしていて、さらに大きな問題です。いつ誰がどこで撤回するのかわかりませんが、横浜市としてもこの数字を追うということでいろいろな政策を展開せざるを得ないというのが今の状況だと思います。

もし原発が少なくなったら今まで以上に節電をしないと、（そのほかの方式の多くの発電所は）CO₂をたくさん出しているのだから、そこを忘れていいのか、という意味でもさらに低炭素都市構造への転換というのは本当に今求められています。

日本でも技術や制御については進んでいるのである意味取組んでいます、世界、特にヨーロッパの都市は（低炭素都市構造への転換が）どんどん進んでいます。これから世界の企業が選ぶ都市はどうかということ。都市のハードでいいところもあるかもしれませんが、やはりエネルギーはどうか。これから都市デザインと一緒にエネルギーデザインをしていく必要があるのではないかと思います。これまで国が全部エネルギーを取り仕切りいろんなことを考えていましたが、これも自治体レベルで、どんなエネルギーをデザインしていくかをこれから真剣に考えなければいけない。

例えば横浜と川崎、あるいは横浜と環境モデル都市仲間の下川町（北海道）では、エネルギーのデザインがまったく違うはず。だから横浜の場合はバイオマスは出来ず、やっぱり太陽光だという話になる。風力は東北の葛巻町が有名になっていますが、同じようなことが横浜でできるかと言うと、できません。

例えば引っ越しや家を新築する時に、当たり前のように東京電力、東京ガスと契約する、水道は横浜市水道局と契約しますが、水道は別としてガスと電力をこれからも同じように契約するのかどうか。私は系統は半分がいいから、あと半分は太陽光から買いますという契約もこれから出てくると思います。こういう選択を提供できる自治体というか、そのような組織にしていかなければいけない、と思います。

BCP（事業継続計画）の関係で言っても、日本はもともと 3.11 前から、世界の都市の不動産投資を考えても、地震のリスクがとても高く、これは保険会社は皆知っていますが、そういう国

です。3.11 でまさにそれが増えたと思います。そうした時に、他にもいろんなリスクがありますが、やっぱりこの地震のリスク、津波災害のリスクは非常に日本にとって足かせであると思います。

日本がそれを逆手に取り、いろんな技術や社会システムでそれを凌駕してる国だということは逆にまたこれから話題になって、都市の質というものに非常に有利に働いていくだろうと思います。リスクがあるということを知覚した上でどうするのか。

特に六本木ヒルズ、地震の時も電力が全く問題なく供給されていたというあの地域では、多分外資を引っ張り込むために BCP を提起していたのではないかと思います。

世界的には、都市の魅力の中に、BCP、エネルギーデザイン、供給の安定性など、そのようなことがまず問われてくると思います。

電気自動車や太陽光などの個々の技術もそうですが、都市として天災に対する安定性という中で、エネルギーの問題を非常に問われると思います。

これはどちらかといえばインフラの話ですが、住んでいてワクワクするとか、きれいだとか、当然これは必要なことだと思います。先ほどの楼閣にならないように、あひるの水かきのようなところを、まず今までと違うインフラが必要であることを、都市のデザインの中で入れ込んでいくべきではないかと思いますし、それが世界に向けられた都市になると思います。

○国吉

ありがとうございました。

ここでサポートしてもらっている鈴木先生にも一言お願いします。

○鈴木

今、信時さんからご指摘あったんですけど、やっぱり環境問題っていうのはこれからの都市デザインの大きなテーマであると思うんです。インナーハーバーの構想の検討の中でも、CO2 の削減をどうするんだっていうことを議論してみると、結局、装置で対応するだけでは絶対に足りない。

都市の作り方、インフラ、ライフスタイルそのもの、交通ネットワークそのもの、そういうものも全部合わせて、合わせ技でやっていかないと、おそらく CO2 の削減っていうのは出来ないだろうという話題になった記憶があります。

そういう点で言えば、モビリティとデザイン、それから土地利用、そういうものをトータルに含めて、新しい都市の、都市計画のあり方を考えるフェーズに今入りつつあるわけです。

そこで都市デザインというものが果たせる役割っていうのは非常に大きいんじゃないかなというふうに思います。

横浜の都市デザインっていうのは、特に何か、これをやったら横浜の都市デザインっていうのは歴史的に見てもないんです。その時代時代で、歴史の問題だとか、水や緑の問題だとかっていう都市計画のテーマを取り込んで、そういう行政の中のある種のイノベーターのような役割をしてきたと思うんです。そういう意味では、環境問題と都市計画、土地利用の問題などをきちっとコンバインさせる方向性はまだ見えてきていない。

今、この時こそやはり新たな都市デザインの取り組みの中で、環境問題を位置づけてやっていく必要があるのではないかな。そこからまた新しいイノベーションが始まっていくのではないかな、というふうに私自身は思っております。

それ以外にでも、先ほどありましたコミュニティの問題だとかいろいろありますけども、私は、第一番に環境問題というのに触れておきたいと思います。

○国吉

アジアにもいろんな友人がいるんです。ブルネイっていうとね、石油がたくさんあってアラブみたいに超高層をバンバン建てるかっていうと、私に相談してきた人間は高い物じゃなくて低い物で、その方がヒューマンな街になるからっていうことで、区画整理みたいなことをやってみたいとかね、そんなローテックな相談を受けたりしたりしてるんです。

アジアの街がみんなシンガポール目指しているわけではなくて、いろんな流れも出てきてるなあという感じがしました。先ほど信時さんが言われた都市の価値みたいなものが、将来どう評価されるかって言った時に、トータルでね、変わってくるのかなあっていうのも感じております。

価値が以前より非常に複雑になっている、だからなかなか、もちろん空間だけでも駄目なんですけど、それをどうやって専門家、あるいは市民も含めて進めていくのか。専門家がどういうふうな体力を作らなきゃ駄目なのか、あるいはどういうチームを作っていくべきかとか、そういうことも今後大事になってくる。

行政の中だけでは駄目だろうという感じは概ね共通してると思いますけど。これについて西村先生何か。

○西村

先ほどのインナーハーバーの問題がありましたよね、野原さんも指摘されたけど、ああいうものをきちんと構想していくことは、これから先の都市デザインの非常に重要な課題だと思うんです。

1個1個小さなもののなかで官民共同や、また住民のパワーで、いろんなことが起きるっていうのは日本全体で起きてくると思うんだけど、大きく都市を構想して50年先を見据えて、何かやらなきゃいけない、それはどういう方向かっていう議論、これは市民一人一人の日常生活の中ではなかなか出てこないわけです。特に工業地帯の問題とか大きな環境の問題とかあると。それがやれるのは、やっぱりある種専門的にそういうものをネットワーク出来る人だと思うんです。その意味で私は、都市デザインの役割は非常に大きいと思うわけです。

その時にどういう組織があり得るか、あるべきか。もちろん私は都市デザイン室みたいなものも必要だと思うけれど。例えば行政以外のもの。行政の中に入っていると非常に難しいのは、どこかの企業の力を借りて、企業のエネルギーを借りて何かやりたいって言った時に、行政ってやっぱり公正だったり公平だったりしないといけないから、何か上手いことどこかだけと協力する、他のところとはやらないっていうことはなかなか行かないでしょ。そうするとある種いろんな手続きがあったりするわけですよ。

もう少し、それを超えて人も動けたり、その中を組織化したりするためには、少しやっぱり違うところにあるプールみたいなものがある必要があるのかなと思うんです。

それが北沢さんが構想したUDCYみたいなものになってるんじゃないか。そうすると将来的にはもう少し都市デザインや専門家が、例えば官から民に移ったりね、民から官に移ったり、また大学に移ったりとか、それこそ官民学が仕事としても動けるようなものっていうのは必要だっていう気がするんです。

私は大学の人間だけど、やっぱりそういうところで経験を積んだトレーニングをね、いろんな人にしてもらいたいと思うし、そういうところから人を取りたいと思います。大学の人間がなかなかそういう時に役に立たないっていうのも問題なんですけど、ただそういうものがなきゃいけないか。

パリにはアピュールという専門家組織があって、そこがパリ市のシンクタンクの役割を果たしていて、それに近いようなものがあり得るのか。そういうものがあれば先ほどのインナーハーバ

一みたいなのも、もうちょっと先に進むのではないかと、そんな感じがしますけどね。

○佐藤

パリは僕よく知りませんが、ラテン系の国はわりとそういう組織があるんですよ。

あのクリチバなんかもすごく有名で、イプキっていうのかな、外にあって行政からは独立して都市計画はそこでやる。都市計画に限らず計画はね、専門家は非常に優位に立ってるというのもあると思うんです。

一方、日本的な文化や次の時代を考えると、そういう専門家もあるかもしれないけれど、僕はまちづくり市民事業っていう本を書いたんですけどね、要するに市民と一緒に事業を作っていく。それはデザインから実際の運営、企画から、そういう主体が出てくるという可能性があると思うんです。いくつか実験的に出来てますし、多分今度の被災地の中ではそういう動きが出て来るんじゃないか。

それはヨーロッパなんかだと、国によってコンテキストは違いますけど、社会的企業なんて言い方をされています。イタリアの社会的組合はすごく強いけども、そういうところに建築家やいろんな市民活動家やそういう人たちが集合して、非常に面白い組織を作っていてネットワークするわけです。それでネットワークが一つの事業をまた生み出すことをやってる。それはまだ主流じゃないですが、この社会を動かしていく力があると思うんです。

横浜の都市デザインはものすごく優等生で、都市デザインの定義、要するに近代以降の都市デザインの教科書通り、極めてきちっとやっている。技術に勝ち過ぎているというのは多分そういうことだと思う。けどそういうものが崩れてきて非常に不連続なものが、一つ一つ力を持って、どう繋がっていくかということが今の社会の中で面白くなっていくのではないと思うわけです。ですから1回そういうかたちで解体されて、そこから組み立てていくエネルギーを持てるかどうかすごく大事なこともかもしれません。

神戸の時は、まちづくり協議会というところがあって、非常に整然として、何かこう、ある種の予定調和みたいなもので出来上がっていきました。そのようなものがないから、今度は絶対そうはならないですね。だけどガバナンスは生まれてくる。非常に不連続なものがつながってきたり重層化して、非常に現代的な実験なんじゃないか。

ここ横浜も多元都市って言っていますよね。そういうイメージがどのように、どのような社会的な仕組みの中で出来ていくのか。討議をしていくというものではそういうものの本当の力は多分出てこないで、そうではない仕組みはどんなふうにも生み出していくのかな。専門家も、そういうなかでどう動いたらいいですかね。

一つの大きな組織とかそういうものを作っていったら、その多元化とか、極めてフレンドリーなものが、一つ一つが力を持つようなものが、そういう中から生まれてくるのかというのはちょっと疑問があります。

○国吉

横浜国立大学は最近動きが活発です。学科の編成をしたり、地域にもっと出ていこうということで、その辺のお話を北山先生から。

○北山

横浜国立大学では、今年から都市イノベーション学府という新大学院をつくりました。東大の都市工は工学部の中にありますが、この都市イノベーション学府というのは文理融合型で都市そのものを学領域とするものです。そこには都市文化を対象とする哲学、思想の研究者、経済学、

都市マネジメント、そして横浜市と連動しながら動いている北仲スクールのような都市文化活動さらに建築、都市基盤、などを専門とする多様なメンバーが入っています。

東大の都市工は 1962 年に出来てますけど、その時の都市に対するビジョンとはおそらく大きく変わってきている。20 世紀型の都市を学領域にするのではなくて、21 世紀型の学領域を構築しようというふうに思ってます。それは、ネットワーク型であり、行政とも一体となり、開かれた学領域となるはずで。大学まちづくりコンソーシアム横浜っていうのも、これもモデルになると思いますが、地域や社会に開かれた大学をつくっていききたいと思っています。

この新大学院の大きなコンセプトとしては、都市は誰のためにあるのか、それは生活する人のためにあるのであって、投資対象や企業のために都市があるのではない。例えばドバイとか中国なんかもそうですけども、全然違うメカニズムで都市が作られているのを、そうではないメカニズム、我々の生活を中心にした人間のための都市であるというイデオロギーを持って作っていききたい。これは個人的な意見ということで違う意見を持っている人もいるかもしれませんが。

○国吉

私は今、横浜市立大学におりますけれども、横浜市立大学のかなりの学生は横浜以外のところから来られて、金沢八景に大学はありますけども、あまり金沢区では遊ばないというような、遊ぶ場もないのかもしれませんが、そういう中で大学としても地域に目を向けていこうという流れがあります。

私は、長年都心部の都市デザインやってきたんですけども、大学の授業の課題としては、金沢区をフィールドに学生の諸君に歩いてもらって地域を知るといようなことをトライしていききたいなあと思ってます。

出来ることは、そういうベースのところからやっていききたいなと思ってますけども、大学としても新しい流れがあります。ちょっと鈴木先生にも一言お願いします。

○鈴木

横浜市立大学も来年度から国際都市学系というのが出来まして、その中でまちづくりコースというのが出来ます。

私も国吉先生もそのコースに所属するんですが、基本的には横浜市立大学には建築系の学科は何もないわけです。ですけれどもその中で都市をマネジメントするというような側面であるとか、これまでとはちょっと違ったアプローチで都市の問題を考えていくような、そういう人材を育てるとい、そういうコースを作っていきたいというふうに考えてます。

いかに多様な議論を引き出していくのか、生み出していくのかということに関しては、話し合いだけでは駄目であるということも佐藤先生のご指摘の通りだなあというふうに聞いておりましたけれども、一方で、これまでとは違ったプレイヤーの人たちの議論がきちっと行われるということも大事なと。

どちらかという我々の世代観、感覚で語ってしまいますけども、都市計画屋の中でも我々より上の世代というか私も含めて上の世代というのは、わりと決まった人たちとの話し合いを繰り返したような気がちょっとするんです。ただここ数年、文化技術創造都市という試みの中です、非常に多様な人とお話をする機会を持つようになって、やはり我々都市計画家であるとか建築家であるとか、専門家というものが話し合っている内容というのは実は非常にクローズドな世界になっていないかということをお問自答させられるような場面があります。

そういう意味ではより開かれた、今まで都市づくりの中では混じり合うことがなかったような人たちとの議論を繰り返す中から、新しい都市デザインの方向性、まちづくりの方向性っていう

ものを見出せるのではないかな、というふうに考えています。

まちづくりコースというあたらしいコースの中でも、何がしかそのような、外と繋がるそういう場っていうんですかね、話し合う場であるとか、人との繋がりをつむぐ場っていうものを一緒に作っていききたい、というふうに考えています。

○国吉

ありがとうございました。大学もいろんな工夫を考えようとしているということです。

市の方もたくさんいるんですが、一番若い桂さんにですね、突然別の世界から都市デザイン室に飛び込んで、その後どうだったのかということ。見通しがあるのかどうか。

○桂

都市デザイン室の桂です。

僕は、もともとは建築の設計をずっとやってきて、空間帝国主義者と呼ばれるような人のもとで働いていたのを、脱藩して都市の方に飛び込んできた人間です。

今、ここの席に座っているのは、都市デザイン室の第二世代として、ということだと思んですが、現場としてはすごく危機感を感じているというか、閉塞感みたいなものを強く感じていて、だから先ほど曾我部さんの話にあった実験都市みたいな話っていうのはすごく興味がある。

第一世代がすごく優等生だったっていうお話が先ほどあったんですけど、最初から優等生だったわけではないと思うんです。最初はすごくやんちゃなことをやってきてたのに、いつの間にか優等生になっていて、第二世代としてはそれを背負うことにすごく閉塞感がある。もう一回やんちゃな、先ほどの西村先生のお話だと融通無碍な方に戻りたいなっていうのがあって、打率2割くらいでも実験なんだから、とずっと打席に立たせてくれるみたいな都合のいい仕組みはないものかなっていうのを思っています。

先ほど顔が見えないとか、都市デザインって黒子に徹するべきなんじゃないかっていう議論があったんですけど、ネットワークを組んでいって、若手が顔を作ってやっていきたい。そのための「融通無碍の会」みたいなのを1個作りたいなっていうのが僕の欲望としてはあって、それがUDCYの方にうまく繋がっていくようなことになればいい。

役所の中にもやっぱり専門家っていうのが要ると思うんです。外部にUDCYみたいなものが出来たときに、それを役所側で受け止める仕組み、組織として都市デザイン室がトロイの木馬みたいな感じで役立つとすごく上手くいくんじゃないか。

やっぱり、これだけのメンバーで話し合ってみているのを聞いても、都市デザインそのものが受け入れる力、プラットフォームとしての機能が非常に強いですし、すごく面白さを共有しやすいと思うんです。いろんなところにちょっかい出しながら、融通無碍なメンバーを増やしていけたらなっていうふうに思っています

○国吉

それほど捨てたもんじゃないということです。

長い間都市デザイン室に関わってきた人がおりますけども、現在は創造都市の部長の秋元さん。創造都市も含めてラージ都市デザインっていうことについてお話下さい。

○秋元

都市デザインの展開ということで、いろんな話が出ていますが、創造都市も基本的には都市デザインの延長線と考えています。デザイン室の中でソフト的なことをやり始め、それが、創造都市として独立したということで、北沢先生の戦略の一つだと思うんです。

都市デザイン室が創りこんできた都心部に、アーティストやクリエイターなどの面白い人材をどうやって入れこんでいくかっていうことは、かなり大きな要素で、それが入ってきたことによっていろんな核融合がおきています。

来週から始まるトリエンナーレは本展は質の高い現代アート展で、それ以外にもトリエンナーレにあわせて行われる連携プログラムでも横浜で常に活動しているアーティストやクリエイターたちの事業が 50 くらい出てます。また、このトリエンナーレの開催期間中に市民の NPO とかが開催する街中のイベントだけでも 200 以上あり、OPEN YOKOHAMA というキャンペーンで紹介しています。

横浜は都市デザイン室が頑張ってきた下地の上に、やはりアーティスト、クリエイターたちがこれだけ集まってくれて、常時いろんな活動をして、それをうまく束ね、支援することが、今後大きな都市デザインの柱になってくるんじゃないかという感じがしています。

(ハードの整備とソフトな活動を有機的に結び付けて考えるということなのですが、) 都市デザイン室的にやはり格好いいものに仕上げなくちゃいけないと思います。横浜市は格好良すぎるって話も出ますが、私はあくまでも都市デザインは格好良く形を残すというところをこだわらなくちゃいけないと思っています。成果としていろんなものを形として残していくところを、創造都市として、都市デザイン室と協力してやらなければいけないと思います。

そういった中で、UDCY を残す、また復活させるかということも私非常に大切なことかなと思っています。BankART スクールや北仲スクールではアーティスト・クリエイターのほかにも NPO や市民の方たちが、いろんな議論を始めて、まちづくり、環境問題など様々な活動を始めています。

行政職員だけでなくそういった方々がまちづくりへ携わってくださってるっていうのは、最近の大きな傾向として出てきていると思います。

多分、行政の職員たちだったりすると、UDCY みたいな行政がコントロールできないものが出てくると大変だな、という感じがするかもしれません。しかしそのような動きをどうやって育てていけるかというのは、今後の非常に大きな柱になってくるかなと思います。

都市デザインを実践的にやってきた人間にとって、行政の外でいろんな議論をする場っていうのが大切です。(時代は、行政が知恵を出して実行する時代から、行政以外の人の意見をフォローして実現化する時代に変化してきています。)

また、事業っていうのはタイミングがあって、いいタイミングの時に喰いついて事業を進めていく、そのタイミングがあるんです。歴史的建造物だと、馬車道の銀行のあとを建て替える問題の時に、それまでの議論やデータの蓄積があったからこそ、あの時に地元の反対運動とも連動して、歴史的建造物の保全制度を急いで作った。それであの建物が残った。多分その前の議論がなければ、蓄積がなければ、ああいうかたちで、あのタイミングであの歴史的な建物が残る制度が出来ることはなかったと思うんです。

そういったことを考えると、50 年後のこと、環境問題・交通問題、いろんな議論をする場があってそれを蓄積し、事業化のタイミングを合わせて実践に移していくということをやっていないと、実践的な都市デザインの進展がないと思います。

企画・計画・調整・事業化で順調に進んで、ものが出来るっていうのは逆に珍しいことだと思いますので、そういった蓄積をつくる場としても UDCY みたいなものは必要になってくるという感じがしています。

○国吉

そうですね。日頃いかにベースを作っていくか。チャンスの時に跳ねようとする、そういうエネルギーをどうやって作ってくるか。

忙しすぎると、ついそういう時間を取れなくなったりします。やはり外に作って、というのも大事かもしれませんね。

最初のスピーチだけで時間がなかったんですが、羽藤さん、山崎さんにも一言。いろんな議論を聞いてですね、今後の展開、あるいは自分としてはこういうことをやるっていうことでもいいですし、お話いただければと思います。

○羽藤

私、普段わりとその、現場というよりは抽象概念で、研究者ですからやっていて、少し現場から遠い人間なんですけど、ただわりと北沢先生なんかと知り合ったりとか、今回の東日本大震災でわりと現場に出るようになってきていて、おそらくすごくこれから空間、都市というものと人間というものは非線形に、想像の範囲を超えて変わる可能性が高いんじゃないかなあということ、少し悲観的に思っています。

先ほど西村先生から計画の時間をどういうふうに入射にのこすかっていう話がありました。象の時間とか蝶の時間って言葉があるように、やはり空間の側ってというのは長い時間の中で変わっていくものですから、かなり遠い射程をやっぱり意識して、それに関してやはり強い専門性で、先鋭的なしかし精度の高い議論をしていかないと。タンカーは突然曲がれませんので。

それに関してはかなり強い危機感を持って考えないと非常なる危機を迎える可能性がある。それは別に変に煽ってるつもりはないんですが、そういうことをちょっと思います。

ただそうは言っても、制約条件として、高齢化が進むとか、情報化が進むとか、あるいは財政が非常に厳しくなるとか、そういう外枠のところ、エネルギー問題とか、それは決まっているので、それがもたらす地域像とは一体何だ、ということをもっともっと具体的に、徹底的に考える必要がある。

我々が今いるエリア以外のところ、郊外と呼ばれるようなところ、そういうところがひょっとしたら村化していくのかもしれないし、村化すればするほど空間がより郊外でこそ重要度が増してくるかもしれない。

あるいは一方でこういう場所の場所性っていうのはもっと違うものになってくるかもしれない。

いろんな議論が必要だと思うので、それこそ融通無碍ですね、やっぱり 2059 年くらいを見据えるとかなり先鋭化した議論が必要だろうと思います。

一方で、それを市民の方々と共有していくうえでは、横浜トリエンナーレというのがかなやっぱり炭鉱のカナリアというか、先鋭化したものを普通の皆さんに叩きつけるというか、増幅させるようなかたちで、イメージを与える力を持ったアーティストの方おられますので、こういう方々と連携しながら、遠い未来だけれども今からやらなければいけないことをどう考えるのか、ということは我々が責任を持ってやっていかなくちやいけないところなのかな、と。

ただ、蝶の時間という言い方が適切かどうか分かりませんが、日々の暮らしの中でどういうふうに調整しながら、象の時間に向かっているかっていう部分はいろんなアプローチがあるので、それは粛々とちゃんとやっていくということ。この辺りが大事じゃないかな、という感想を持ちました。

○山崎

先ほどコミュニティのデザインという話をしましたが、市民の方々や市民団体の人たちと話をしていこうと思うと、そういう人たちをうまくコーディネートする人が必要です。これが行政の内部にいるべきか、あるいは行政と市民の間にいるべきか、という話からすれば、行政の外側にいる専門家集団というのが非常に大切になってくるし、その中にやはりハード派とソフト派の人が一緒にいてほしいなあという気がいたします。

僕はデザインのワークショップに関わることもあるんですが、自分が設計をやっていたということも含めて、物の色や形について市民から意見を貰うということを極力やりたくないなと思っています。

市民参加型のワークショップをやって、赤がいい、青がいい、とか、和風がいい、洋風がいい、って言い始めたら、その市民の数だけその意見が集まっちゃいますから、聞かなきゃいけなくなったデザイナーは、何となく全部織り交ぜたようなものを作ることになるわけです。

だからもうそこは、24 時間、形のことを考えている専門家に任せたほうがいいです。あなたたちは生活のプロだから、そこで一体何がしたいのか、どういう状況をそこに生み出で欲しいのかをどんどん言って下さい。それをこちら側でいったんまとめて、大きく言えばこんなようなことがしたい、主体的に関わりたいという意見が出ているということを経験者の方々に渡して、ここから先はこの人たちが形を作る、という仕組みをきっちりとする。

そうしないと、先ほどお洒落なデザインに最後まとめたと言っていたものが、市民参加なんてことやっちゃうとお洒落じゃなくなるとかね、というような話になっていってしまうと思います。

それは仕切りの問題であり、先ほどの UDCY というものがあるとすれば、そこの中の組織の問題でもあるだろうなあというふうに思います。

専門家は何かをするかという話に引きつけて言うのですね、多分その専門家がソフトの部分の人なしに意見を聞いたらちょっとまずい事になるかもしれないから、徹底的に形だけを作る、市民はとりあえず文句は言うておこう、みたいな関係だとお互いに不幸です。

さらにそれが何十年も続くと先鋭化したものばかり作ってくれる専門家がいるんだから、私たちは意見を言ってもしょうがない。専門家と言われる人が優秀過ぎれば過ぎるほど、だんだん市民はお客様になっていくような気がします。

ある一定のところから、もうあの人等に任しといたらええ、と。行政に任しといたらいいじゃないか、という話に諦めのモードがどうしても出と思います。やっぱりその間をどう繋いでいくのか、市民に話し合って貰った方がいいものは何なのか。しかも話し合うということをネタにして、実は目的としてはその人たち同士をチーム化したり、繋げていったり、信頼できる関係性をどう作っていくのか。この複線化というのか両方を、都市のあり方の話と市民のチームを作っていくことの両方を、上手く器用に作っていく人、バランス感覚の優れた人がそのある種の新しいタイプの専門家として行政の外部の組織の中にいるといいなあと思います。

最後にそれは一体誰なのか、ということ言えば、僕は建築家という人たちはそのバランス感覚に非常に優れているんじゃないかなあと思っています。

僕自身はそれほど優れたデザイナーではないですけども、建築の設計している時の感覚に非常に近い。建築も設計も家族のそれぞれの意見を聞いて、意見を聞いたままそのまま纏めただけでは何の感動もないんですね。そんなことになりましたか！というふうに、皆があっと驚くようなアイデアを出してもらわないといけな。

この時アーキテクトというのは、よく建築学科で習いますけども、アークとテクネーといういくつかの諸技術の一つに美しく統合化してくれる職能です。この諸技術が今までは構造であったり設備であったり法規であったり予算であったり、そういうのを一つに統合化させる職能だったんです。が、これから一部の建築家的存在は、八百屋のおっちゃんや商店街のおっちゃんやホテルのおっちゃんや行政が言うことを美しく統合化させてビジョンを示していくというアーキテクトになってもいいんじゃないか。

これが多分コンピューターのレベルではアーキテクチャーを構築する人であり、CPU とシステム化とメモリーとってというバランスをとって最終的に美しいコンピューターのシステムを作っ

ていくし、OS のシステムも同じようになっている。これもアーキテクトの仕事なんだろうというふうに思うとすれば、ソフトのアーキテクト、アーキテクチャー、そういうもの考えていく人ってというのがいて、同時にハードのアーキテクトもいるという組織が、先ほどの話に出てくるような、市と協働しながら上手くまちのビジョンを作っていけたら、すごく頼もしいなあという気がいたします。

○国吉

ありがとうございました。

横浜に付き合っている市民の方たちを考えると、そう上手く分けられないかなあと。結構形まで我々がやるという、そういうスタンスを持ってますので、出来るだけ近いところまで共有して行って最後は、やっぱり納得づくで専門家に任す。最初から割っていると上手くいかないかな、というような感じがちょっとしましたけども。

どういうふうにエネルギーを使っていくのかっていう課題かな、という感じがしました。曾我部さん、いかがでしょうか、その辺。

○曾我部

まちの人たちと、デザインをする立場の人との関係というのは、少し具体化してきたというか成熟してきています。みなさんの話をお聞きして、この先の活動の仕方が少し見えてきたような気もしました。

少し違った話になりますが、クリエイターが集まる街としての問題について触れたいと思います。横浜市はここ数年クリエイターを集めてきました。あるいは横浜トリエンナーレとか、そういうクリエイティブな活動を集めてきた。我々もその口車に乗せられてやってきて、もう6年目に入ります。口車じゃないです、重要なチャンスということであ…。

少し気を付けたいなあと思うこととして、ある意味不動産的な、地域的な意味でそういう人たちを集めるという仕組みは上手くいって集まっている。いいんじゃないかなあと思うんですけども、もう一つ、そういった活動をする人たちの活動を評価し理解する、そういう仕組みが出来るといいんじゃないかと思うんですね。横浜市での活動で獲得した作品や表現があるわけですが、それはいろんな人の評価を得たいですし、外に問いたってというふうに思うんです。

ちょっと愚痴っぽくなりますけど、最近僕が関わっている、横浜市関連でやったいくつかのプロジェクトが、外に問うこと（専門誌などでの発表）が許されなかったという悲しい事件がありました。止むを得ない事情があるだろうから、それに文句言うつもりはないんですけど、なるべく活動している人たちの活動をより発展させられるような評価の仕組みが、あるいは公表を受け入れる仕組みや行政側の気持ちが重要です。その相乗効果でより活発な活動につながっていく。そういう状況をつくり出すことが、次に求められることじゃないかなというふうにちょっと最近では思っています。

○国吉

どうもありがとうございました。

時間も短くなったんですが、中田局長、いかがでしょうか。

○中田

都市整備局長の中田です。

今日のお話聞いて思っていました、都市というものを考える時には、そこに生活する人たちの生活の積重ねがあって形づくられているのであって、その中では人間の生き様の現れが、都市デザインなのかなと思いました。

ハードとソフトが相対立するものではなくて、それぞれが補完し合って、補い合っていくものじゃないかなと思って、そういうことに気付かされた気がします。

そういうことと言えば、やはりいろんな知恵がないと駄目なのかなと思います。日本の風土気候っていうのはもともと災害が発生するような土地柄ですから、そういう中でハード面の工夫もされてきた。例えば、皆さんご存知だと思うんですが、輪中堤とか信玄堤とか霞堤みたいなものは、自然の脅威と上手く付き合うような、共存出来るようなかたちでハードづくりもやられてきてるんです。これから、3.11の震災のあとの復興なんかも考えてみると、そういうことも踏まえてやっぱりデザインしていくことが大事なんじゃないかな、と私自身は感じました。

私どもの事業でやっている中に、地域まちづくり推進条例に基づく様々な活動があります。今回の震災を受けて、地域で活動している人たちがこの震災に対してどういう動きをしたかアンケート調査したら、やはりお年寄りに対する声掛けをして、皆で広場に集まってきたとか、地域のコミュニティがすごく醸成されているのを感じました。

そういう意味で、地域コミュニティづくりも都市デザインとしての横串として、考えていった方がいいのかなと思います。

格好いい言葉で言えば、エリアマネジメントというような言い方をされますけども、やっぱりもっと地道な地域コミュニティっていうものを醸成していくってことも都市デザインの活動として大事だと思います。

そして、最後は格好よくやりたいっていうふうにおっしゃってましたけども、結構泥臭いところがないと最後は格好よくまとまらないと思います。泥臭い中に入っていくことも十分考えていかなきゃいけないし、そういう現場に入ることによって初めて気づかされることも多いと思います。

今後の都市デザインを考えるのであれば、そういう視点を持った方が良いものが作られていくと感じました。

○国吉

どうもありがとうございます。

それでは現場の責任者であります、中野室長。こういった創造的な、クリエイティブなプラットフォームを今後用意できるのか。それとか、若い人をどう育てていくのかも含めて、一つ、大変だと思いますが。

○中野

どういう方々に集まっていたいて、どういう話をしようかっていうことを、この半年余りいろいろ考えてきました。期待通り、本日は皆さんに横浜の都市デザインに対するいろんな示唆をいただいて、まずは感謝したいと思います。

ラウンドテーブルの中でも、鈴木先生に発表していただいたような都市の構想や長期的なスパンの話というようなことと、山崎さんに話していただいたようなコミュニティのような話と、都市デザインという一つの言葉の持っているものの中に、大きく二つのいろんな示唆をいただいたというふうに思っています。

ニューヨーク市に行った時に、コミュニティデザインみたいな話を少し聞いたところ、コミュニティボードというエリアごとの組織があって、日本でいうとエリアマネジメントということだと思いますが、地域のことは地域でマネジメントしていく。地域の方々の力がついてきて、市民の力だとか市民の中の専門家の力を合わせていくことによって地域の課題を解決したり発信していく。ニューヨーク市は何をやってるんですかって聞いたら、「何もやってませんよ」、と言っていました。

主役は地域の人々が地域のことをやっていくということを、菅さんがいったように専門家が黒子的に支援しながら上手くマネジメントしていく都市デザインというものも今日は、いっぱい議論していただいたと思います。

もう一つは、西村先生に言っていたように、非常に長いスパンですね、信時さんがおっしゃったようなエネルギー問題を含めて都市を考えていく必要性が、都市デザインにはあると思います。先般山崎さんとエコノミストの先生との対談を聞いた時に、高齢化社会に伴う経済的な問題で都市にどんな影響があるのかということなどを考えるべき時期に来ていると痛感しました。エリアごとの発想ではなかなか見通しにくい都市の構造や環境の変化に基づいてどうしていくべきなのか。こういったことを議論していく専門家の役割というものも非常に大切だということも今日の議論でよく分かったということでございます。

専門家の皆さん、特に大学の先生方や地域で頑張っているプランナーの方、行政、どういうふうにネットワークして力を合わせていけるのかということが、新しく横浜が他の政令市含めてですね、モデル的に示していかなければいけないスキームなのかなあと思うところがあります。

今日の議論なども踏まえて、是非こういう議論の場を増やしていったり、透明性を高めてもっと議論をしていくような環境を市として整えていけたらなあというふうに思っています。

○国吉

ありがとうございました。力強い言葉でした。

東京と横浜の関係は 40 年前とはまた違った関係になっているでしょうし、東京湾ということで港なんかも再編成していくってような流れもあります。スキームそのものも変わってくるなかで、都市として、全体に持続しながら地域がどういうふうになるかということもあるかと思えます。アジアの中でどうやっていくか。

最後にこういう今日の議論を踏まえてですね、小松崎副市長よりご意見を。宣言でもいいですけど、是非。

○小松崎

今いろいろなお話うかがっていて、私もムラムラと言いたいことが出てまいりましたので、少しだけ感想を申し上げたいと思います。

まず今日のシンポジウムは実は、国吉さんの卒業記念シンポジウムだったんだということも改めて分かりました。皆さん国吉さんに拍手して下さい（拍手）。

国吉さんという人は直弟子を作らない人ですから、国吉の前に国吉はいないし、国吉の後にも国吉はいない、ということで、これから我々は本当にどうしようかというところもあります。

冒頭申し上げましたが、私は解釈としては実践的運動論ということをやっと横浜市はやってきたと思っております、運動論というのは止まったら終わりになるので、この運動論は止まることはなくて、ずっと回り続けていくと思います。

今日の議論は、私は最初から想定しておりましたが、やはり狭い意味の都市デザインの議論では収まり切らず、結局、都市そのもののこれからの在り様という議論になったと思います。これは本当に健全なことだと私は思いますが、じゃあ横浜というのはこれから一体どういう方向に向かうのかということが本来問われていることなのかもしれないと思います。

6大事業というものがありましたが、これからの横浜の新6大事業があるとすれば、それは一体何か、というテーゼになってくると思います。

それは、今日出た課題の中で言えば、低炭素まちづくりであったり、あるいはこれは私自身が言っていますが、横浜市はみどり税のように、皆さんからたくさんいただいているものを有効に使って、横浜に新グリーンベルトを作ろうじゃないか、こういう壮大な考え方もあるわけです。

また、私たちは文化観光局を新しく作りました。文化ということを基軸に何が出来るのか。それから羽田空港の国際化、国際戦略港湾という二つの港のハブ化を踏まえて、新しい骨格の整備が問われている。またインナーハーバーの問題、そういった諸々が、これは私が勝手に今の時点で想像力を働かせて言えば、そのようなものが出てくるのだろーと思ひます。そういったことの中に都市デザインというこのグループが、どのような役割を果たすことが出来るのかと、いうことにもなつてまいります。

今日は一言も出てきませんでしたが大、都市プランナーという言葉があります。仕事をやつていく上で3つくらい、刃物を使う場面があるとすれば、ナタがあつて、包丁があつて、医療用メスがあると思ひます。繊細なものが切れるものはメスですけども、非常に大きなナタでぶつ切りにするやうなもの、例えば制度を動かさなければいけないといったことは都市プランナーと言われている人たちの役割なのかもしれないませんが、そこに当然デザイナーがかんでくるということもあります。

ナタで切る具体例をいへば、一つは大都市制度の問題があります。我々は早いとこ県から独立したい、二重行政を排除したいと思ひています。

最近では、いわゆる PPP（公民連携）の世界でも、これを国際貢献の中でどうやって生かすのかという問題もあります。

郊外の問題で言えば、これから私は大規模団地の再生問題というのがすごく大きなテーマだと思ひております。そこにまた福祉の問題が絡みます。福祉の問題というのは、これも今日は語られませんでしたが大、各地域、各区ごとに今、地域福祉保健計画というものが出来ていて、これをもとにして、相当きめの細かい人と人の繋がりというものが現実には地域でできてきています。

福祉のことと、例えば広場づくりというやうなハードのことを、どこかで結びつけるやうなことが可能になってくる、そういう時代背景にあるのではないかと思ひています。広場の活かし方ということですごく触発される部分があるわけです。

一方で包丁やメスを使って何をするかという、私はこれからはコラボレーションだと思ひているので、文化芸術の話とどう絡むのか、また、インナーハーバーの問題など、これまでの倍になるほどに都市デザインの領域を拡げて関与していくべきではないかと思ひております。

本当はもっと言いたいことがたくさんありますが、これくらいにさせていただきます。どうもありがとうございます。

○国吉

どうもありがとうございます。そろそろ時間でございます。

会場にですね、長く都市デザイン、横浜の都市デザインを支えていた方々もたくさんいらっしゃいます。また、若い意欲のある方もたくさんいらっしゃいます。ご意見も賜りたかつたんです

が、今日はこういうかたちでラウンドテーブルのメンバーだけにさせていただきたいと思います。

またこういう、あちこちからの意見もありましたように、いろんな場を作っていくのは必要だと思っております、大学が中心になったり、あるいは新たな組織を作ったり、こういったものが次に展開できるような工夫を皆で考えていければというふうに思います。

それでは、第二部のラウンドテーブルをこれで閉じます。

○司会

ではこれで第二部を終了させていただきます。

では、締めくくりの主催者を代表いたしまして、横浜市都市整備局、中田局長からご挨拶申し上げます。中田局長お願いいたします。

【主催者挨拶】

○中田

今日はお忙しい中、大勢の専門家の方にご議論いただきまして横浜市の都市デザインのあり方、あるいは都市づくりのあり方そのものの議論をすることが出来て本当に有意義だったと思います。

それと今日はお暑い中皆さん本当に大勢の方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。

こういった機会を通じて、横浜市の新しいまちづくりに向けてこれから我々行政を含めて頑張っていきたいと思っておりますので、市民の皆さまと一緒にこういったまちづくりを語り合える場、あるいは活動できる場を、増やしていきたいと考えてます。

まち普請とか道普請とか、普請っていうのは皆さんが出て汗を流して、ものを作り上げていくっていう言葉が日本語にはございます。そういった意味で地域の皆さんと一緒に、まちづくりを考えていくことの重要性もこれからの都市デザインを考える上では重要な要素なんだと思いました。

都市デザインの 40 年を振り返った中で次の展望をこういうかたちで議論出来たということに対して、心より感謝申し上げます。

本当に今日はありがとうございました。

【閉会】

○司会

中田局長、ありがとうございました。本日ご出席いただきました皆さまにもう一度拍手をお願いします。

本日は長時間にわたりお付き合いいただき、ありがとうございました。これで、シンポジウム「横浜の都市デザイン活動の 40 年とこれから」を終了させていただきます。

なお、本来ならば会場からいただく意見交換なんですけど、このあとの交流会に本日のスピーカーの皆さんも参加されますので、そちらで意見交換をしていただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

□